

ハ強陽性血清デモ弱陽性血清トデモ全然溶血ヲ阻止シテ了ヒ強陽性ノ場合ニハ24—48時間後ニモ何等溶血ノ痕跡スラモ示スコトガナイ。而シテ之ハ反應第一相ニ40—45分ヲ費サシメル一般術式ヲ用ヒタ場合ト同様デアアル。

斯ノ如キワケデアアルカラ著者ハ抗元ニ多少改良ヲ加ヘテソレノ溶血毒トシテノ作用ヤ抗補體作用ヲ少ナカラシメ加フルニ微毒血清及ビ補體トノ結合ハ迅速デシカモ他ノ抗元ニ比シ多量ノ補體量ヲ固ク結合シ得ルヤウナモノヲ作り出シタナラバ實際上ニ應用シテワ氏反應ニ要スル時間ヲ著シク短縮セシメ且ツソノ結果ヲ正確ナラシメ得ルデアラウト考ヘタ次第デアアル。ソコテ著者ハ牛心ヲ「エーテル」テ處置シテ脂肪分ヲ除キ粉末トシタモノヲ更ニアルコホル」テ處置シコレニ「コレステリン」ヲ添加シタノデアアル。カヤウニシテ調製セル抗元ヲ肝臟抗元ト比較シテ見ルニ第一ニ溶血毒トシテノ働キハ後者ニ比シテ著シク弱ク後者が反應使用量ノ $1\frac{1}{2}$ 量テ溶血ヲオコスニ反シ使用量ノ20倍ヲ試ミテモカ、ル毒作用ヲ認メ得ナカツタシ又抗補體作用ニツイテモ著者ノ抗元ノ方が遙ニ利益ガアルコトヲ示シテキル。

第二ニ此ノ兩抗元作用ノ強サデアアルガコレヲ檢ス可ク一方ニ於テハ微毒血清一定量ニ抗元ノ遞降量ヲ加ヘ他方ニ於テハ抗元ノ一定量ニ陽性血清ノ遞降量ヲ加ヘテ試驗シテ見タガソノ結果ハ抗元力ニ於テハ兩抗元トモニ大差ナキコトガワカツタ。

ソコテ第三ニハ各抗元ニヨリテ結合サレル補體量ハ相異ルモノデハナカラウカトイフ想

像デアアル。ソコテ著者ハコノ兩抗元ニ補體ヲ増量的ニ加ヘ次テソノ直後竝ニ45分ヲ隔テテ溶血系ヲ添加シタノデアアル。然ル處第一相ニ長時間ヲカケタ方ノ實驗テハ肝臟抗元ハ3倍。牛心抗元ハ12倍量ノ補體ヲ結合シ。第一相ヲ短縮シタ試驗テハ後者ハ2時ニハ \pm 單位ノ補體ヲ結合シタニ拘ラズ肝臟抗元ノ方ハ1單位スラモ時ニヨツテハ完全ニ結合シ得ヌテフ結果ヲ示シタ。

カク著者ノ「エーテル」ヲ以テ脱脂セル牛心ヲ材料トシテ調製セル抗元ハ微毒血清及補體ニ對シテ強イ結合力ヲ有スルカラ反應第一相ヲ充分ニ短縮セシメ得ル利益ガアルトイフ。尤モ抗元ノ結合力ハ補體ノ種類ニモ關スルモノデアツテ例ヘバ人血清ヲ補體トシテ使用スレバ短縮サレタ第一相ヲ用フル試驗法テハ陽性血清モ陰性ノ結果ニ陥ル。換言スレバ人ノ補體ハ海猿ノソレニ比シ吸著サレ方ガ緩徐ナリト解ス可キデアルト著者ハ考ヘテキル。何レニモセヨ著者ノ調製ニカ、ル抗元ハ肝臟抗元及ビ其他ノ微毒反應用抗元ニ比シテ微毒血清ナラビニ補體トヨリ迅速ニ反應スルカラシテ質地檢査上判定ニ要スル時間ヲ短縮セシメ得ル利點ガアル。著者ニヨレバ反應所要時間ハ20—25分デアツテ最モ迅速ト思ハレル絮狀反應ト殆ド等シトイフ。

尙ホ著者ハ反應第一相ヲ短縮スル方法ヲ用ヒテ反應時間ヲ20分ト限定シ強陽性及弱陽性血清400例ヲ試驗シソノ中8例ダケガ所期ヨリモ稍々弱イ程度ノ陽性ヲ示シタ丈ケデアトハ悉ク一般法ト完全ニ一致スル成績トナツタト稱シテキルノデアアル。

雜

報

西部、中島兩博士歸朝

纏ニ「ロックフェラー財團研究員トシテ歐米出ニ張シテ居ラレタ西部増治郎博士ハ12月9

日ニ中島壽博士ハ10月8日ニ夫々歸朝セラレタ今春來歸朝セラレタ當研究所ノ諸氏ハ城井尙義博士ヲ首メトシテ小島、細谷、西部、

中島諸博士連テアツテ當所ハ頓ニ活氣ヲ呈スルニ到ツタ。

學術集談會

12月19日午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會ヲ開催シタ演題ハ下ノ4題デア

1. 耳下腺瘻孔穴ニ非經口的ニ注入セル耳下腺細胞成分ノ耳下腺分泌ニ及ボス影響ニ就テ 杉島一郎君
本誌前號(第13卷第12號)ニ同一題名ノ下ニ原著トシテ掲載サレテアルカラソレヲ參照セラレタイ。

2. ミクロマニプラチオン」ニ就テ 千島壽君

綜説欄參照

3. 癩菌ノ培養ト癩ノ血清診斷ニ就テ 田宮貞亮君

綜説欄參照

4. 中樞神經親和性濾過性病原研究ノ現況(續キ) 高木逸磨君
前號綜説欄參照

黒屋博士近況

拜啓

暫ク御無沙汰致シマシタ。先日武田君カラノ御葉書ニ依レバ先生御病氣ノ由モハヤ良クナラレタ事ト思ヒマスガ遙ニ心痛致シテ居リマス。小生ノ方ハ一同相不變無事デスカラ御安心下サイ。昨日長崎醫大ノ阿部君倫敦ニ向ヒ當地ヲ出發サレマシタ1月31日ニ横濱到着ノ由、西部君ハ今頃傳研へ行カレタ頃デセウ。コレテ當地ハ小生一人トナリマシタ。傳研ハ去年トハ違ヒ續々ト歸所サレル人々テ滿員ノ盛況デセウ。次ニ小生近況ヲ御報知致シマス朝ハ大低8時頃ニ起キマス「パン」ヲ三切ト「コーヒー」位テ朝飯ヲスマシテ9時ニ家ヲ出テ日本人會ノスグ傍ノ Nollendorfplatz カラ地下鐵道テ Thielplatz マテ參リマスコノ道程ハ2里以上アルト思ヒマスガ凡ソ20分位テ參リ

マス Thielplatz ノ驛カラ歩イテ公園ノ中ヲ通り抜ケテ研究所マテ參リマス 御承知ノ ダーレムニハ理研位ノ研究所ガ7ツモ立チ竝ンテ仲々盛況デスカ小生ノ通ツテキルノハ其内テハ小サイ方デス10時頃研究ノ仕事ヲ始メテ大低2時頃マテヤツテ居マスソレカラスグ傍ニアアル Harnackhaus トイフ研究所員ノ俱樂部ノ様ナ所へ行ツテ午餐ヲヤリマス。一食95ペニヒ」テ1週間分切符ヲ前賣スルコトニナツテ居リマス傳研食堂ノ食事ノ倍位ノ値段デスカ倍以上ウマイ様デス。

ソレカラ大抵3時頃マテ新聞ヲ讀ンダリ散歩シタリシテ遊ンデカラ研究所ニ歸リ6時ガ仕事ノ都合テハ7時頃迄マタ働イテ家ニ歸リマス。家ニ歸レバ飯ヲ食ツテ風呂ヘ入ツテ寢ル許リデス。コレヲ毎日繰リ近シテ居マス。仕事ハ頭ヲツカフ事ハ非常ニ少クテ大低手先ノ仕事許リデス。雜誌ヲ讀ム機會ガ無イノテ段々馬鹿ニナル様ナ氣ガシマス。コレハ小生許リテハ無ク一緒ニ居ル日本ノ九州農大ノ助教授ノ人モ同ジ様ナ事ヲ云ツテ居マス。他ノ獨逸人ノ助手連モ研究所ヘ來レバ仕事許リシテ讀書スルコトハ非常ニ珍シイ。コレハコノ研究所ノ一ツノヤリ方デアアルト思ヒマス。ツマリ教授1人が本ヲ變ンテ全部ノ人が其「テー」テ仕事ヲヤツテ居マスカラ教授ハ頭テ働ク事ガ多イガ他ノ連中ハ獨創力ガ無クナツテ唯手先テ許リ仕事ヲスル様ニナル虞ガアリマス尤モ小生ノ如ク本統ノ化學ノ研究室ニ入ツタ事ノナイモノハ種々ノ點テ獲ル所ハ非常ニ多イ様ナ氣ガシマス。日本テ化學ヲヤツテ來タ人々ニハ自分ノ勝手ナ事ヲヤラシテ呉レナイカラ少シモノ足リナイカモ知レマセン。併シコノ研究所テ外國人ノヤル仕事ハ大低前ニ教授ガ手ヲ著ケテ居ル仕事デスカラ其ノヤリ方ナドハ大低他ノ助手連ノヤツテ居ルノヲ見テカラスル様ニナツテ居マス隨テ無駄ナ仕事ニ時間ヲ費スコトハ非常ニ少イ。即チ1人ノ人が無駄ヲシナガラツクリアゲタ仕事ガアレ

バ次ノ人ハ其無駄ヲシナイ様ニスベテ 仕事ノ能率ヲ中心ニ考ヘテヤツテ行キマス。デスカラ短時間ノ内ニ多クノ仕事ガ出ル事ニナリマス。ダガラ助手連ノ指圖等モ仲々細クヤカマシイ我々が考ヘテ何レデモ好イト思ハレル事デモ一々キチントヤリ方ヲ決メテ、アル型ガ出来テ居ル様ナ氣ガシマス。小生ノ只今ヤツテ居ル仕事ハ合成化學ノ練習デスガ是ハ今四ツ程アミノ酸ノ合成ヲスマシテ仕舞ヘバ終ニナリマスノテ其ノ途中テ仕事ニ費ス Borneol-phosphorsäure ノ合成ヲヤツテ居マス。コレハ日本ノ「タカヂアスターセ」ノ中ニ一種ノ Phosphatase ガアツテ此酵素ハ例ノ自然ニアル Zucker Phosphorsäureverbindung ヲ分解スル許リテナク人工的ニツクツタ Phosphorsäureester ヲモ分解スル事ガ出来ルトイフ事ノ證明ニ使ハレタモノデスガ夫レヲ使ツテ續ケテ先ニ行カウト云フノデス。大シテ大問題ノ「テーマ」デハアリマセンガ折角教授ガ呉レルノデスカラヤツテ居マス。コノ間其ノ「エステル」ノ作り方ニ就イテ一寸シタ改良ヲヤリマシタラ大變ニ喜ンデ呉レマシタ。コンナ工合デマタ本統ノ仕事ニハカ、リマセンガ本年1月カラハ愈々其ノ方ニカ、ル事ニナリマセウ。スコシハ纏ツタモノヲ報告デキルカモ知レマセン。カウシテ毎日ヲ過シテ居ルノデカナリ體ガツカレマスノテ日曜ノ朝ハ大變寢坊ヲシマス。日曜日が大變樂デス。

12月ハ21日頃カラ1月6日頃マデ休ニナルトノ話デスコレモ日本トアマリ變ハアリマセン。近頃ハ方々ノ店ガ「クリスマス」ノ飾リテ奇麗ニナリマシタ。御承知ノ様ニコツチハ「クリスマス」ノ方ガニギヤカテ正月ノハ大シタ事ハ無サソウデスシカシ小生ハ日本人デスカラ正月ニハ是非雜煮ヲ食イタイト思ツテ居リマス。日本料理店ニ行ケバ飾モ買ヘルソウデス。日本ノモノトイヘバ昨日ツオーノ近所ノ食料品店デ日本ノ柿ヲ賣ツテ居ルノヲ買ツテ來マシタ。1個30ペンニヒ」デスカラ15錢

ニアタリマス其程高クハ無イシ味モ仲々ヨカツタ。ラッキョー」モ賣ツテ居マシタ。何レモ日本ノ名前共ノマ、テ呼ンテ居マシタ。一寸ナツカシク嬉シカツタノデス。研究所モ人ハ殖ヘルシ益々盛ニナル事デセウ。集談會モ毎月ヤル様ニナツタ様子デスガ内容抄録ノ事ハ小生雜報係ヲヤツテ居タ時ニモ一度宮川先生カラ御話ガアツタ様ニ覺エテ居マスガ小生ノ如ク外國ニ居ルモノニ取ツテハ本統ニ結構ナ企ダト思ヒマス、

今日ハコノ位テ止メテ置キマス 研究所各位ニ宜シク御傳聲ヲ願ヒマス。御體御大切ニ
12月1日

黒屋政彦

佐藤秀三先生 机下

傳染病研究所學友會會計報告

自昭和4年1月1日
至同年12月31日

收入

金7,101圓3錢也 前年度ヨリ繰越額
金7,310圓94錢也 收入總額
合計金14,411圓97錢也

支出

金7,581圓4錢也 支出總額
差引現在金6,830圓93錢也

内譯

金5,091圓4錢也 銀行定期預金
金1,158圓71錢也 別口銀行定期預金
金90圓50錢也 銀行特別當座預金
金490圓68錢也 現金

上記之通ニ候也

昭和5年1月9日

傳染病研究所學友會幹事

宮川米次

寄附金

學友會ヘ左ノ寄附金アリタリ

金貳拾圓也 木積一次君
金拾五圓九拾九錢 岸野茂樹君

十二月中職員異動調

技手 滋賀 秀俊

月日	異動事項	官職	氏名
11. 30	神奈川県下へ出張ヲ命ス		
		技手	滋賀 秀俊
11. 30	依願傳染病研究所寄生蟲 病學研究業務囑託ヲ解ク		
			和田 馨
12. 6	依願免本官	技手	西部増治郎
„	傳染病研究所ニ於ケル病 理學研究業務ヲ囑託ス		西部増治郎
12. 9	東京府下へ出張ヲ命ス		
12. 12	依願傳染病研究所病理學 研究業務囑託ヲ解ク		岡 治道
12. 23	昭和4年12月20日付 願研究生退學ノ件許可		
			池 田 清
„		同	關口 三郎
„		同	青 柳 豊
12. 26	同		杉本 洗三
12. 6	歸朝	技手	西部増治郎

ルヤ否ヤヲ決スルコトが出来ルノデアル。

著者等ハ先ヅ動物組織トシテ牛肉、肝、腎等ヲ用ヒソレヲ細挫シテ PH: 6.5 ノ後衝劑ト葡萄糖トノ混合溶液中ニ浮遊セシメタノデアル。コレヲ何レモ嚴ニ無菌的ノ操作ノ下ニ施行シ且ツ OH' ニヨル偶發的ノ轉移ヲ出來ル丈ケ避ケタトノコトデアル。ソノ結果ハイヅレモ陰性ニ了リ葡萄糖ハ果糖ニ轉化サレナイトイフヤウナ成績ニナツテキル。シカモナホ動物組織以外ノ醸母菌ヤ腐敗菌ヲ用ヒタ場合モ同様デアツテコノ場合ハ葡萄糖ノ濃度ハ著シク減少スルガ糖ノ轉化トイフコトハ遂ニ證明サレナカツトイフ。尙ホ魚肉粥ヲ用ヒテノ實驗ノサイニハ「インシュリン」ヲ添加シテ見テモ葡萄糖ノ分解モ行ハレナケレバ又轉化モ認メラレナダト言フ。

第2實驗 大腸菌ニヨル分解ニ就テ

次ニ著者等ハ第2ノ問題トシテ各種細胞ニヨル葡萄糖ト果糖トノ分解速度ノ相違ヲ檢セムトシ先ヅ Bacillus coli aerogenes ヲ用ヒテキル。

即チ「エルレンマイエル氏コルベン」ニ100cc「ブイオン」ヲ加ヘソコニ果糖ナリ葡萄糖ナリヲ1gヅ、添加シテ更ニ大腸菌ノ「ブイオン培養」ノ8—10ccヲ合シコレヲ孵卵器ニ納メイロイロナ時間ノ後ニソノ糖分解ノ程度ヲ比較スルノデアル。

糖定量ノ際ニハ蛋白質ヲ除去セキバナラヌ

ガ此際ニ燐ウオルフラム酸ヲ使用スルトナルトイロイロノ注意ヲセキバナラヌシ且ツ最モ難關トナル事ハ果糖ノ大部分ガ蛋白ヤ「ペプトン」ト共ニ沈澱シテ了フ事デアル。而シテ是ハ別ニ菌ガ加ハツテ居ラナイ「ブイオン」ニ就テモ同様ナノデアル。Neuberg und Kobelニヨレバ果糖(及ビ磷酸六炭酸)ハ他ノ「アミノ酸」ヤ蛋白體(ペプトン)ト緩カナ結合體ヲツクルトノ事デアルカラソノ程度モ「ブイオン」ノ相異ナルニヨツテ自ラ差ガアルコトデアラウト思ハレル。モシ燐ウオルフラム酸デ果糖ノオチルノガカ、ル緩カナ結合體ノ存在ニヨルモノトスレバコ、ニ他ノ沈澱劑ヲ用ヒテコノ結合ヲ離シ蛋白體ノミヲ落スコトヲ考ヘキバナラヌ。ソコテ著者等ハ昇汞ヲ用ヒタノデアル。尤モコノモノハ完全ナ蛋白沈澱劑トハ言ヘヌガ著者等ノ場合ニハソレデモ差支ナイトイフ。又果糖ニツイテ比色法ヲ施行スルニ當ツテハ必ずシモ水銀ヲ除去シテオク必要モナイトノコトデアル。カ、ル實驗ノ結果ハ果糖ハ葡萄糖ニ比シテソノ分解サレ方が遙カニ速カデアルコトヲ確實ニ認メ得ルトイフ。

要之、著者等ノ實驗デハ動物ノ組織ハ「インシュリン」添加如何ニ拘ラズ葡萄糖ヲ果糖ニ轉化スルコトガナイトイフコト及ビ大腸菌純培養ヲ用ヒテノ實驗デハ果糖ノ方が葡萄糖ヨリモ速ニ分解サレルトイフ結果ニナツテキルノデアル。

雜

報

◎新年式及ビ祝賀會舉行

1月4日、午前10時所長室ニ於テ新年式ガ舉行セラレタ。

丁度長與所長ハ舊臘ヨリ支那ニ出張シテ居ラレタノデ二木教授代ツテ式辭並ニ訓辭ヲ述べラレタ。例ニヨツテ先生獨特ナ面白味ノアルモノデ我國ガ元來やまとノ國ト稱スル所以ハイやまどカナル國即チ漢字ヲアテ、大和ノ

義デアツテ上下一致、君臣和合、益々以テ一家團樂ノ態ヲナストイフワケデアルカラカ、ル國ニ生レアハセタ吾々所員モ互ニ融和シ協同シテ事ニ當タラキバナラヌトイフヤウナ意味ノコトデアツタ。

ソレガ終ツテカラ食堂デ祝賀會ヲ行ツタガ緊縮ノ折柄字義通りノ粗酒粗肴テ甚ダ簡單デハアツタガ縁起ノヨイ干支ニ互ニ幸先ヲ祝シ

合ツテ正午近クニ散會シタ。

金壹百圓也

松井勝冬君

◎學術集談會

1月16日(木曜)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會が開催サレタ。演題ハ下ノ4題デアアル。

- 1) 子宮筋成分ノ子宮收縮運動ニ對スル影響ニ就テ
外田麟造君
- 2) 非經口的肝臟細胞注入ノ肝臟機能ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究
村上甫君
(本誌第13卷第13號ノ原著欄參照)
- 3) 海外ニ於ケル組織培養研究ノ大勢
西部増治郎君
(本誌綜説欄參照)
- 4) 本邦ニ於ケル住家性ノ鼠屬ニ就テ
山田信一郎君
(本誌綜説欄參照)

○寄附金

學友會へ下記ノ通り寄附アリタリ。

- 金貳百圓也 木積一 次君
本誌前號寄附金欄ニ木積一 次君寄附金貳拾圓也トアルハ金貳百圓也ノ誤植ニ付茲ニ再掲
金七圓四拾五錢也 木積一 次君
金貳圓四拾錢也 平野寬一君
金八拾五圓也 木積一 次君
金壹百拾九圓貳拾錢也 村上甫君
金七拾圓也 久木田五郎君

一月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
11. 30	昭和4年11月30日付願 研究生退學ノ件許可ス		佐野忠
12. 24	支那へ出張ヲ命ス教授 出發	長與又郎 同	
12. 28	昭和4年12月28日付願 研究生退學ノ件許可ス		上垣新吾
12. 31	依願免本官	技手	長瀬龜吉
5年1.4	歸朝	教授	長與又郎
1.10	昭和5年1月9日付願研 究生入學ノ件許可ス		土木重
1.15	昭和5年1月12日付願 研究生入學ノ件許可ス		下瀬忠則
1.24	任東京帝國大學教授 助教授		三田村篤志郎
„	敘高等官三等	同	
„	補傳染病研究所所員	教授	同
1.24	任東京帝國大學助教授		細谷省吾
„	敘高等官六等	同	
„	補傳染病研究所所員 助教授		同
„	傳染病研究所ワイル氏 病研究業務囑託ヲ解ク		同
1.30	昭和5年1月29日付願研 究生退學ノ件許可ス		外田麟造

雜 報

◎學術集談會

2月20日午後1時カラ所内講堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレタ演題ハ次ノ2題デアル。

1. 酸化還元電位測定法ニ就キテ
(本號綜説欄掲出) 佐藤 秀三君
2. 猩紅熱病原ニ對スル疑義
(來月號綜説欄掲載ノ豫定)
二木 謙三君

○寄附金

學友會ヘ下記ノ通り寄附アリタリ。

- | | |
|----------|--------|
| 金壹百圓也 | 外田 麟造君 |
| 金參圓五拾四錢也 | 上垣 新吾君 |

○一月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
1. 31	依願免本官	技手	秋山 猛
”	任傳染病研究所技手		井上 康平
2. 14	依願傳染病研究所治療 研究業務囑託ヲ解ク		奥野 徹
2. 15	敘正七位	所員	細谷 省吾

雜 報

◎山極博士薨去

豫テ御病中デヲラレタ 山極勝三郎先生ニハ 3月2日午後9時遂ニ逝去セラレタ。寔ニ哀悼ニ堪エザル次第デアル。

先生ノ偉業ハ學俗共ニ憬仰スル所敢テ茲ニ、嘸々スルヲ要セヌノデアル。ソノ光輝アル苦闘ノ歴史コソハ永久ニ後進ヲシテ感奮興起セシムルモノトナルデアラウ。

◎所内園遊會

3月15日(土)午後〇時半ヨリ例ニヨリ觀梅園遊會ヲ開催シタ。

稻荷神社祭典ニ初マリ各種ノ餘興ヤ模擬店ナドデアタ刻マテ賑ツテ居タ。

◎學術集談會開催

3月20日(木)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學術集談會開催演題下ノ7題デアル。

南京鼠腹腔液中ニ出現スル鼠咬症 Spirochaeta ノ研究、追加特ニ Agglomeration 現象ニ就テ

鯛 瀬 國 一

余等(西澤鯛瀬)ハ第3回微生物學聯合學會ニテ既報セル如ク感染南京鼠腹腔液中ニハ血液ニ比シ甚ダ多數ニ且ツ長期ニ互リ鼠咬症 Spirochaeta ノ出現シ居ルヲ知り之ガ系統的觀察ヲ行ヒタリ。

被驗南京鼠ハ體重 20gr 内外ノモノヲ使用シ。接種材料ハ本 Sp ヲ多數含有セル感染南京鼠腹腔液及ビ含有數極メテ少數ナル海獺血液ヲ使用シ。接種部位ハ腹腔、皮下、皮内、血管ニ就テ行ヒタリ。

觀察ハ暗視野鏡下ニ於テ行ヒ最初50日間ハ日々爾後ハ5日置キニ斃死ニ至ル迄之ヲ検査シタリ。

此ノ實驗成績ヲ基礎トシテ感染南京鼠血液

竝ニ腹腔液中ノ Sp 出現關係ニ就キ 考察ヲ行ヘバ次ノ如シ。

1. 接種部位異ナル場合ニテモ Sp ハ常ニ腹腔液ヲ最良ノ棲息場所トシ殆ンド限局性ニ多數出現シ普通1視野10—50匹或ハ夫以上看視シ得ル事アルニ反シ血液ニテハ出現最頂ニ在ル場合ニテモ5.6匹ヲ數フル程度ナリ。

2. 血液竝ニ腹腔液中ニ出現セル本 Sp ノ運命ハ血液中ニテハ感染當初ニ可ナリ多數出現スルモ漸次減少シ2—4ヶ月ヲ經過スレバ數視野、數10視野ニ1匹之ヲ發見スルガ時ニヨリ發見シ得ザル事アルモ全經過ヲ通シ完全ニ消失スル事ナシ。腹腔液中ノ出現經過ハ或鼠ニ於テハ出現最頂ニ達シタル後斃死ニ至ル迄出現數ニ異動ヲ來ササルモ或鼠ニテハ甚ダ動搖ヲ來ス事アリ。サレド長時日ヲ經過シ南京鼠ノ老衰ノ域ニ達シタルモノニテハ大抵多數ノ Sp 出現ヲ來スヲ常トシ余等ノ最モ長キ觀察 350日ニテ斃死セルモノニテハ一視野50匹以上ヲ算シタリ。即チ本 Sp 感染南京鼠ハ自然治癒ハ考ヘ得ラレザルナリ。

3. 腹腔内接種ニ在リテハ血液ニ比シ早期ニ之ヲ證明シ Sp 含有數多數ナル南京鼠腹腔液ヲ使用シタル場合ニハ接種翌日ヨリ、含有數僅少數ナル海獺血液ヲ用ヒタル時ハ3—5日ニシテ之ヲ證明シ得ルモ血液ノ初出現期日ハ大抵1週間前後ナリ。即チ患者ヨリノ菌分離ハ南京鼠腹腔液ヲ利用スルガ最モ有利ナリ。其他ノ接種部位ニテハ出現期日兩者略々同時ナリ。

4. 腹腔液中ノ Sp 出現數ハ腹腔液濃度、南京鼠個性、腹腔内ノ器械的刺戟、脾臟剔出等ニヨリ動搖ヲ來ス。又標本作製法ニヨリ其成績ニ差違ヲ生ズル恐アリ。

南京鼠以外ノ實驗動物ニテハ白鼠、海獺ハ幼若ナルモノニテハ腹腔液ハ血液ニ比シ稍々

多數ノ出現ヲ見ルモ成熟セルモノニテハ兩者略ク同様ナリ。家兎ハ3頭中1頭ニ於テ唯1回1匹腹腔液中ニ之ヲ證明シタルノミナリ。

鼠咬症以外ノ病原性 Sp ニテハ Sp. icterohaemorrhagiae 南京鼠腹腔液ハ血液ヨリ多數ノ證明シ得ルモ鼠咬症 Sp ノ如ク多數ナラズ。Sp. Duttoni ハ之ニ反シ血液中ニ多數ノ出現ヲ見ル。又病原性 Trypanosoma, Tryp. gambiense, Tryp. evansi, Tryp. equiperdium ニテハ兩者略ク同様ナリキ。

本 Sp 感染南京鼠ノ臨牀所見ヲ見ルニ發熱。淋巴腺腫脹。脱毛。生殖器障礙等ハ之ヲ認ムルモ接種局所ノ病變即チ初期硬結様症狀ハ實驗的ニ證明シ得ザリキ。

腹腔液中ニ出現スル本 Sp ノ形狀ハ血液中ノ夫ト同一ナルモ大サハ稍ク大ナル感アリテ之ヲ計測スルニ 3.07μ ヲ算シタリ。運動ハ血液中ノニ比シ甚ダ緩慢ナルモ食鹽水、血清等ヲ注入シテ腹腔液ヲ稀釋スル事ニヨリ急ニ活潑トナルモノナリ。

感染南京鼠及ビ其血清感染海獺血清ニ就キ免疫學的研究ヲ行ヒタルニ Object 硝子上ノ溶菌現象重感染試験ニテハ免疫物質ノ存在ヲ證明シ得ルモ Pfeiffer 氏現象。再感染試験ニテハ之ヲ證明シ得ズ。感染南京鼠血清ヲ感染南京鼠ニ注入スルモ體內ノ Sp ニ何等ノ影響ヲ及ボサズ。又感染南京鼠仔鼠ニ感染試験ヲ行ヒ先天性免疫物質ノ存在ヲ探知セルモ不結果ニ終リタリ。又非特異性反應。W氏反應。村田氏沈降反應ヲ行ヒタルモ陰性ニ終リタリ。

化學療法トシテ Neosalvarsan, Bayer 205, Trypaflavin, Chium. hydrochl. Emetin hydrochl. Kokomel 等ヲ使用シタルニ Neosalvarsan ニテハ完全ニ治癒セシメ得タルモ他種化學藥品ニテハ不可能ナリキ。

鼠咬症 Sp ノ Aggloration 現象ニ就テ從來精細ナル觀察ヲ行ヒタルモノナシ。余ハ感染南京鼠腹腔液中ニテ之ヲ觀察シタリ。本現象

ノ自然形成ハ感染南京鼠ノ約5—10%ニ於テ認メ其數種々ニシテ400—500匹群集シタルモノヨリ數匹—10匹内外ノ少數ナルモノアリ。形狀ハ多ク絲毬狀ヲ呈シ其中心ハ血球若クハ纖維様物質ヲ抱ク事稀ニシテ個々ノ Sp ハ毬ヲ中心トシ求心性若クハ周邊性ニ微弱ナル移動運動ヲ營ム Agglomeration ハ自然形成ノ外。人工的ニ形成セシメ得。即チ感染南京鼠ノ脾臟剔出。諸種動物血清並ニ臟器浸出液ヲ腹腔内接種スル事ニヨリ之ヲ發揮セシメ得然レドモ諸種化學藥品ニテハ不可能ナリ。Agglomeration ノ發揮物質ト免疫體トハ密接ナル關係ヲ證明シ得ザリキ。

植物性毒素「リチン」ノ精製

ニ就テ

寺尾秀三

高田眞

Ricinus communisノ種子中ニ含有セララル、猛毒性物質「リチン」ハ一定ノ潜伏期ヲ有シ易熱性ニシテ且ツ抗原性ヲ有スル等細菌毒素殊ニ Exotoxin ニ類似セル點多ク其ノ本態ハ尙不明トナレドモ蛋白質説有力ナリ。

余等ハ「リチン(Merck)ノ水溶液ヲ作り之ヲ先ヅ細谷、宮田兩氏ノ Exotoxin 精製法ニ準據シテ所理セルガ未ダ完全ニ蛋白反應ヲ呈セザルニハ至ラザリキ。依テ之ヲ更ニ獸炭吸器或ハ Willstätter ノ酵素分離法ヲ應用シ種々ノ蛋白質現色反應ヲ呈セズ然カモ強力ナルリチン毒素液ヲ得タリ(精製行程ニヨリ約60%ノ Ausbeute ヲ得タリ)

此ノ精製「リチン」ハ 37°C 48時間ニテハ Trypsin ニ破壊セラレズ 70° — 75°C 1時間ノ加熱ニヨリ毒性ヲ失ハズ。

沈降原性又抗毒素產生能力アルヤ否ヤハ目下研究中ナリ。

コレラ菌ノ溶血現象ニ就テ

柿原辰雄

楊自汧

El-Tor 菌ト從來ノ Cholera 菌トノ溶血現

象ノ相違ニ就テノ研究ハ van Leghem, Baerthlein, Schnapper, u. Kovacs 等ノ報告有リ余等モ此溶血現象ニ就テ實驗セルニ、更ニ 2.3 ノ新知見ヲ得タリ、其大要適録スレバ次ノ如シ。

使用菌株、El-To, Koch 株(Paracholera); Haemolyse ノミ著明。

Finkler-Prior, 青島株(類似孤菌); Haemolyse 及ビ Haemodigestion 著明。

23 T., 19 T. 株(Gholera); Haemodigestion ノミ著明。

23 H., 19 H. 株(Cholera)溶血現象陰性。

其ノ他研究室保存菌株數十株。

使用血液、脱纖維牛血液ヲ充分食鹽水ニテ洗滌セル血球ノミヲ使用ス。

A. (1)種々ノ溫度ニテ處置セル血球ヲ以テ製作セル培養基上ノ所見。

血球ハ攝氏 60 度 30 分ニテ完全ニ溶血ス。55 度以下ニテハ、尙ホ血球ヲ殘在セシメ、70 度以上ニ至レバ Haemoglobin ヲ沈降ス。斯クノ如ク各種々ノ溫度ニテ處置セル血球ト寒天トヲ以テ製作セル平板培地上ニ各菌ヲ移植スル時ハ、

(イ)作用溫度ニ關係ナク又通常血液寒天トシテ提供セラレシ場合 Haemolyse, Haemodigestion 共ニ著明ナリ。

(ロ)Haemoglobin 寒天ニ於テハ Haemodigestion 現象ヲ起ス菌ニヨル溶血現象ノミ認メラル。而シテ此現象ハ 90 度以上ノ溫度ニテ處置セル血球材料ヲ以テセル場合著明ニシテ、70 度又ハ 80 度ニテ處置セル材料ヲ以テセルモノニ於テハ該溶血現象著シク不明瞭トナル。

2. 硫酸、鹽酸、醋酸、Methylalkohol, aethylalkohol, aceton, Chroloform, formalin 石炭酸及ビ昇汞等ヲ以テ血球ト作用セシムルトキハ、一定稀釋濃度(藥物ノ)ニ於テ血球ハ完全ニ溶血ス。而シテ其ノ濃度以下ニ於テハ、稀釋濃度ニ應ジ溶血スルモ、尙ホ、血球ヲ殘在

ス。又其ノ一定稀釋濃度以上ニ於テハ Haemoglobin ヲ沈降セシム。

斯クノ如ク種々ノ稀釋濃度ニ於テ得タル處置材料ヲ充分生理的食鹽水ニテ洗滌シ、該作用藥物ヲ除去セル材料ヲ以テ製作セル血液寒天及ビ Haemoglobin 寒天平板ニ各菌株ヲ移植スル時ハ大體次ノ二様ノ形式ヲ取ル。

(イ)醋酸 Chroloform 及石炭酸等ニテ得タル材料ヨリ製作セル種地上ノ所見ハ血液寒天ノ Haemolyse, Haemodigestion 現象ノ區別對照ニ比シ相違ナキモ、Haemoglobin 寒天上ニ於ケル所見ハ、溫度ニヨル區別ノ如ク、明瞭ナラズ。即 Haemoglobin 現象ヲ有セザル菌株モ尙ホ菌苔ノ周圍ニ溶血帶ヲ現ハス。

(ロ)前 3 種ノ藥物以外ノ場合ニ於ケル處置材料ヨリ製作セル培地ニ於テハ、血液寒天上ニ於ケル所見ハ前者ト殆ンド同一ナルモ、Haemolyse 寒天上ニ於ケル所見ハ溫度ノ場合ト同様明瞭ニ Haemolyse 及ビ Haemodigestion 現象ノ菌株ヲ區別ス。然レ共、稀釋濃度ノ場合ニ得タル材料ニ於テハ兩現象ノ區別比較の困難ノ場合アリ。即 Haemodigestion 現象無キ菌株モ多少溶血現象現ハル、如ク見受ケラル、事アリ。

3. MgCl, CaSO₄ KCl, CaCl 及ビ MgSO₄ 其ノ他還元劑 Kalium Metabisulfit 及ビ Natrium Hyposulfurosum 等ヲ血液寒天ニ混入セシメ、各菌ヲ移植スルニ Haemolyse 及ビ Haemodigestion 現象ニ、特ニ、阻止的ニ或ハ促進的作用ヲ與フル場合ヲ認メズ。

4. 1%ノ割合ニ、Stärke, Galactose ヲ血液寒天ニ混入セシムル時ハ、菌ノ發育幾分阻止サル、モ大ナル影響ハ與ヘラレズ。而シテ Haemolyse 現象ハ幾分阻止サル、モ尙ホ著明ナリ。

Haemodigestion 作用ハ著シク阻止サル。

Saceharose, guluose ヲ使用スル時ハ菌ノ發育甚シク阻害サレ Haemodigestion 現象全ク認メラレズ、然レ共 Haemolyse 現象ノミ

ハ尙ホ相等著明ニ現ハル。

Glykogen, Dextrin 及ビ Inulin ハ殆ソド影響ヲ與ヘズ。但シ、Dextrin ハ僅ニ兩現象ノ阻止サル、ヲ認ム。

5. 比較的低壓ノ下ニ培養スル時ハ、Haemodigestion 現象ノミ著シク阻止サル、モ更ニ普通ノ状態ニ培養スルトキハ、Haemodigestion 作用再ビ著明トナル。Haemolyse 現象ニハ著シキ相違ヲ認メズ。且菌ノ發育ニハ殆ソド、影響ヲ認メザリキ。

B. 各菌株ヲ約 1000 倍石炭酸加照内 Pepton 水ニ培養スルトキハ、結局 Haemodigestion 現象能力ノミハ全ク菌株ヨリ消失セシムル事ヲ得。

然レ共 Haemolyse 現象ノミハ何等ノ變化モ蒙ラズ。寧ロ、青島株ノ如キハ、Haemodigestion 現象消失ノ結果 Haemolyse 現象ハ以前ヨリ一層増強セルヲ認ム。

今處置ニヨリ變化セル菌株ニ就テノ 2.3 實驗ヲ記セバ次ノ如シ。

1. (イ) Haemodigestion 現象ヲ消失セル菌株ハ動物通過ニヨリ原性状ヲ再ビ獲得スル事能ハザリキ。

(ロ) 普通寒天連續培養ヲナストキハ、約 2 週間目ヨリ青島株ノミ再ビ原性状ヲ示スニ至ルモ、他ノ菌株ハ斯カル事ナシ。

(ハ) PH ヲ異ニセル「ペプトン水ニ培養スル時ハ青島株ノミ約 2 週間目ヨリノ PH ノ如何ヲ問ハズ漸次、Haemodigestion 現象ヲ現ハスモ、他ノ菌株ハ斯カル事ナシ。

(ニ) Agglutirabilität ハ原株ニ比シ幾分低下ス。

(ホ) 含水炭素、高級アルコール分解作用ニ原株トノ相違ヲ認メズ。

2. (イ) Haemodigestion 現象著明ノ菌株ハ Pepton 水培養液中ニ多量ノ gelatin 溶解酵素ヲ證明シ得。然レ共、一度 Haemodigestion 現象ヲ消失セシムルトキハ同時ニ該酵素ノ產生モ止ム。特ニ、1 照内 Pepton 水使用ニ際

シ著明ニ區別サル。Pepton 含有量増加セル場合ニハ Haemodigestion 現象無キ菌株ト多少該酵素ノ發生ヲ認ム。

Fräukel 氏蛋白培養基中ニハ、Haemodigestion 現象ノ有無ニ拘ハラズ、該酵素ハ證明サレズ。然レ共、Haemotoxin ハ尙ホ多量產生サル。

(ロ)、Haemotoxin ト gelatin 溶解酵素トノ間ニ於ケル關係ハ、PH 培養日數及ビ Pepton 含有量トノ關係ヨリ見ルニ一定ノ平衡ヲナサズ。

且ツ Haemotoxin 產生ニ就テ見ルニ菌株ニヨリ相違アリ。青島株ハ 24 時間ニシテ最著明ニシテ、漸次減少スルモ、El-Tor, Koch, Finkler 株等ハ 5—7 日ニシテ最頂ニ達ス。(1% 照内 Pepton 使用ノ場合)

C. Haemodigestion 現象著明ナルモノニ於テハ、Colonie ヲ中心ニ輪狀ノ黒褐色ノ色素ヲ形成ス。其ノ本態ヲ研究セルニ恐ラク一種ノ硫化物形成ニヨルモノ、如ク思考サル。理由次ノ如シ。

1. 血液寒天上ニ於テ該色素ハ Haemodigestion 著明ナルモノニ於テノミ生ジ、Haemolyse ノミノ部ニ於テハ認メラレズ。

2. (イ) Pepton ノ種類ヲ異ニセル血液寒天上ニ於ケル該色素形成ハ、各種 Pepton 水培養ニ際シ發生スル H₂S ノ量ト必ズシモ一致セズ (H₂S 發生ハ 10% 醋酸鉛液ニ浸シタル紙片ノ黒色ニ變化セル程度ヲ以テ檢シタリ)。且硫黃及ビ cystin 加血液寒天上ニ於テモ特ニ該色素對照ニ比シ著シク著明トナラズ。cystin 加血液寒天ニ於テハ反ツテ、該色素消失スルモ、Haemodigestion 現象ハ早期ニ發現ス。

(ロ)、然レ共、血球ノミニ各菌ヲ移植スルトキハ何レモ著明ナル H₂S ノ發生ヲ認ム。株ニ Haemodigestion 現象著明ナル菌株ノ H₂S 發生又著明ニシテ、Haemodigestion 現象無キ cholera 菌ノ發生甚ダ僅少ナリ。然レ共 Eltr, Koch 株ノ如キハ H₂S 發生甚シク著明ナル

モ、該色素ハ證明サレズ。

即該色素ハ Haemodigestion 現象ト H_2S 發生著明ノ場合ニ於テノミ著明ニ發現スルモノニシテ、Haemodigestion 現象又ハ H_2S 發生ノ一方僅少ナル時ハ該色素モ又甚シク僅少ナルモノナリ。

尙ホ血液寒天斜面ニ菌ヲ移植シ H_2S ノ發生ヲ見ルトキハ Haemodigestion 現象著明ノ菌株ノミ核 H_2S 發生著明ニシテ El-Tor, Koch 菌ノ如キ H_2S 發生著明ノ菌ニ於テモ遂ニ發生スル事ナシ。

(ハ) Haemolyse ヲ起ス菌株ハ血球液ヲ 24 時間以内ニ必ズ凝固セシム。Haemodigestion 現象著明ノ菌株ハ 48 時間乃至 72 時間ニシテ凝固セシムル事ヲ得ルモ、兩溶血現象無キ菌株ハ遂ニ血球凝固作用ヲ認メザリキ。

3. 該色素ハ Haemoglobin 又ハ Stroma ノ何レヨリ生ズルモノナルカ?

(イ) 血球ヲ蒸餾水ニテ溶血セシメ強力遠心器ニテ、大部分ノ Stroma ヲ沈降セシメ、比較的 Stroma ノ少キ上部ト、比較的大量ノ管底部ヨリ得タル材料ニテ製作セル血液寒天ニテ比較セルニ、著明ナル兩者ノ差異ヲ認メザリキ。

(ロ)、陳舊血球ヲ使用セル培地ニ於テハ該色素發生不著明トナル。

(ハ)、硫酸鐵、枸橼酸鐵、醋酸鐵加血液寒天培地ニ於テ該色素ノ特ニ著明トナル事ヲ認メズ、又 Cholesterin 加血液寒天培地ニ於テモ然リ。

Nat. Oleicum, Lecithin 加血液寒天ニ於テハ常ニ該色素甚シク著明ニ發現ス。

少クトモ、Stroma 中ノ Lipoid ハ該色素發生ニ關係深キモノ、如ク思惟サル。

(E)、一般ニ Cholera 菌ノ溶血現象ヲ檢スルニ當リテハ照内 Pepton ヲ使用スル時ハ甚ク著明ニ發現スルモ、Wittepepton ハ幾分前者ニ比シ劣ルモノナリ。

菌ノ毒力ニ關スル實驗的研究

(第一報)

特ニ試験管内ノ毒力増強方法

ニ就テ

眞柄正直

菌ノ毒力ヲ増強サセル最モ簡單ナ確實ナ方法ハ動物通過デアル、併シ動物通過ニヨル毒力ノ増強ハ一般ニ通過ニ用ヒタ動物ニ對シテノミデアルト考ヘラレテ居ル。

肺炎雙球菌 1 型 (Rockefeller 研究所カラ送ラレタ菌株) ノ永ク氷室ニ放置シタ結果非常ニ毒力が下リ、其ノ「マウス」ニ對スル最小致死量が 10^{-2} mg トナツタモノヲ使用シテ、此ノ問題ヲ驗ベタ、即チ此ノ菌株ヲ一方マウスヲ通過セシメ他方家兎ヲ通ツテ、是等兩様ノ菌ノ「マウス」ニ對スル毒力ヲ驗ベタノニ、孰モ 10^{-8} mg ノ最小致死量ヲ示シタ、家兎ニ對スル最小致死量ハ、原株デハ 40mg テアツタノガ家兎通過後 $\frac{1}{3125}$ mg トナリ「マウス通過後 $\frac{1}{625}$ mg トナツタ、斯ノヨウニ、肺炎雙球菌 1 型ノ毒力ハ「マウス通過ト家兎通過ノ如何ニ拘ラズ、雙方ノ動物ニ對シテ顯著ニ増強スルモノデアル。

次ハ試験管内ノ毒力増強法デアルガ、自分ハ培養基トシテ血液ヲ選ンダ、此ノ理由ハ、以前、血液ノ殺菌作用ニ關スル實驗ノ時認メタ事實、即チ、同一ノ菌株ニ就テ見ル時、毒力ノ高イモノホド血液ノ殺菌作用ニ影響サレ難イ等、毒力ト血液トノ間ニ密接ナ關係ガアルト云フ事實ニ依ルノデアル。

先ヅ、家兎ノ枸橼酸曹達加血液ニ植繼イダノニ、肺炎雙球菌 1 型ノ「マウス」ニ對スル毒力ハ「マウス通過ニ劣ラズ極メテ、著シク増強シタ、ヘパリン」ヲ加ヘテ凝固ヲ防イダ血液デモ上記ノ場合ト同様良好ナ結果ヲ得タ、併シ、全血液ヲ使用スルト毒力ノ増強ハ極メテ僅カデアル、脱纖維血液ニ植繼グ時ハ完全ニ陰性ノ結果ヲ見ルノデアル、有效成分ガ血漿中ニ存スルノデハナイカト考ヘラレルガ、チトラ

一ト、プラズマ」ヲ用ヒタノニ、コ、デモ毒力ノ上昇ハ見ラレナカツタ。最後ニ、各々夫自身デハ效力ヲ持タナイ所ノ「チトラート、プラズマ」ト脱纖維血液トヲ混合シタモノニ菌ヲ植次イタノニ、意外ニモ極メテ著明ナ毒力ノ増強ヲ認メタ。

斯ノヨウニ、血液成分ノ孰レノ部分ガ菌ノ毒力増強ニ影響スルカト云フ點ハ不明デアアルガ、兎ニ角、可成、本來ノ血液ニ近ク成分ヲ備ヘ、而モ、凝固ヲ妨ゲラレタ家兎ノ血液ガ、肺炎雙球菌I型ノ「マウス」ニ對スル毒力ヲ「マウス通過ト同程度ニ極メテ高度ニ増強セシメル事實ヲ發見シタ。又、此ノ菌ヲ馬血液ニ植繼グノニ同様顯著ナ毒力(「マウス」ニ對シテ)ノ上昇ヲ認メタ。肺炎雙球菌ノミデハナク、バラチフスB菌等デモ、之ヲ家兎ノ血液ニ植へ次グト其ノ「マウス」ニ對スル毒力ハ、マウス通過ト同程度ニ増強スルコトヲ認メタ。

Diphtherie 毒素ノ精製法ニ就テ

大 山 西 一

Diphtherie 毒素ノ性質作用ガ酵素ニ類スル所カラ毒素ノ精製ニ R. Willstätter ノ Adsorption und Elution ノ方法ヲ應用スル事ガ最も適當デアラウト信シ研究ノ歩ヲ進メタ所從來ノ Kaolin 或ハ水酸化アルミニウム」ニテハ良キ結果ヲ擧ゲ得ナカツタ。

然ルニ 1896. L. Brieger ガ創メテ用ヒタ ZnCl₂ ニ依ル毒素精製法ノ Mechanismus ガ今日尙等閑ニサレテアルノヲ遺憾ニ思ヒ此機序ヲ明カニスベク種々ノ實驗ヲ行ヒ次ノ結果ヲ得タ。

(1). Rohtoxin = ZnCl₂ ヲ加ヘテ Toxin ヲ落ス時ニ此沈澱ヲ分析スルニ必ズ磷酸ノ反應ガ強ク陽性デアアル。

(2). 毒素ヲ作ルニ用ヒル培地ノ組成ヲ變化サセルト ZnCl₂ ノ一定量が落ス毒素ノ量ハ培地ノ磷酸鹽ノ含有量ト密接ナ關係ガアル。

(3). Rohtoxin ノ毒性ニ變化ヲ與ヘズニ

PO₄ 鹽ヲ全部除去スルト〔之ニハ NH₄Cl + NH₄OH + Mgacetat ヲ用フ〕茲ニ生ズル新シイ毒素ハ最早 ZnCl₂ ニヨリ沈澱シ無イ性質ヲ有シ之ニ磷酸鹽ノ適當追加アルニ及ンテ毒素ハ沈澱シ來ル。此際落チル毒素ハ Binret 反應弱キモノデアアル。大略以上ノ様ナ事實カラ Brieger ノ ZnCl₂ 法ニ於テ Rohtoxin ヲ落ス第一般ノ反應ハ PO₄ 鹽ノ存在ガ必要テ活性表面ヲ有スル Pa₄ 及ビ Zu ノ或種化合物ヲ吸著核トシテ之ニ毒素ガ特殊的ニ吸著スルト見ルヲ至當トスル。此 Zinkphosphat ヲ Adsorbeus ト見ル説明ガ正シイトスレバ週期律上同一群ノ他ノ金屬ノ磷酸鹽ヲ Adsorbeus ニ用ヒタ時ニモ同様ナ毒素吸著ヲ見ル筈デアアル豫想ニ違ハズ(a) Gruppe ノ Ca, Sr, Ba 及ビ(b) Gruppe ノ Cd ハ何レモ Phosphat ト結合スルト毒素ヲ著シク吸著スル Adsorbeus トシテ用ヒ得ルノデアアル。又 Adsorbeus カラ毒素ヲ引離ス際ニ用ヒル方法即チ Elution ニハ(a)ノ場合ニハ NH₄ Oalat ノ(b)場合ニハ細谷氏法ニ習ヒ NH₄S ヲ用ヒル。

毒素ニ就キ從來應用ノ困難デアツタ Adsorption und Elution ノ方法ハ週期律第三群ノ Ca, Sr, Ba, Zn, Cd ノ Phosphat ヲ Adsorbeus トスルト比較的容易ニ精製シ得ラレル。

鳩ノ「トリコモナス(Trichomonas columbae)ノ純培養並ニ其生物學的研究

西 澤 行 藏
矢 島 登 美 太
金 子 勘 太 郎

著者等ハ鳩ヨリ「トリコモナス(Trichomonas columbae)ヲ純粹ニ培養シ得本原蟲ノ形態培養性狀繁殖並ニ免疫學的反應等ノ生物學的研究ヲ行ヒタリ。

殊ニ其培養ヲ以テ南京鼠ニ對スル感染試驗ニ成功シ其病原性ヲ確メ其病變ニ就テ述べタリ。

志賀赤痢菌毒素及ビ抗毒素

ノ研究

- 第1報 細谷省吾
岸野茂樹
寺尾秀三
- 第2報 細谷省吾
寺尾秀三

志賀菌ノ發生スル毒素ニ關スル文獻ヲ綜合スレバ

(1)家兎ニ於テ定型ノ痲痺ヲ起シ時ニ大腸特ニ盲腸ニ出血性炎症ヲ起スモノ即所謂家兎毒ト

(2)海獺ニ於テ Marasmus ヲ起スモノ即テ所謂海獺毒

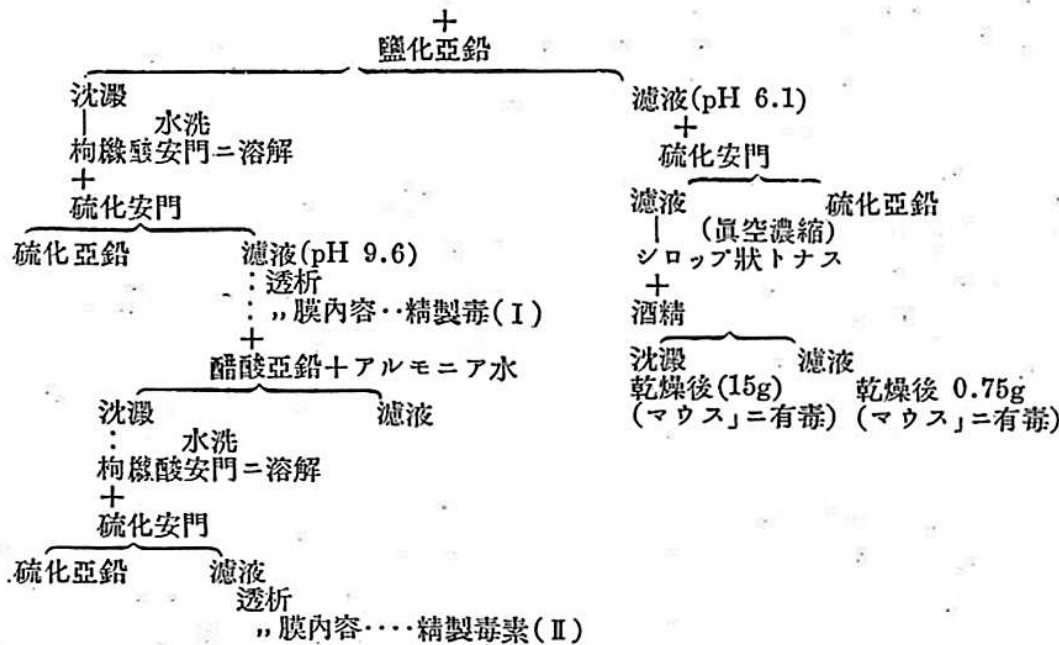
トニ二大別セラル前者ハ易熱性ナルニ反シ後者ハ耐熱性ニシテ菌體內毒素ナリト稱セラル。更ニ家兎毒二元説ヲ主張スルモノ (Olitzky 等)アレドモ一元説有力ナリ又痲痺毒ト瀉瘧毒 (海獺毒) トヲ全ク別個ノ毒素ナリトスル

モノ (渡邊)又ハ之ニ賛セザルモノアリ。是等ハ複雑ナル組成ヲ有スル志賀菌菌體ノ Präparat 又ハ同菌ブイオン培養ヲ以テ行ヒタル實驗ヲ根據トシテ論議セルモノナルヲ以テ諸説紛窮シテ解決セザルハ當然ノ事ト云ハザル可カラズ。余等ハ本菌ノ培養ヲ分析シテ動物試驗ニ於ケル如何ナル毒素人間ノ赤痢ニ於テ Hauptrolle ヲ Spielen スル毒素ニ相當スルカヲ極メントシ若シモ之ガ達成セラレタル曉ニハ本毒素ニ對スル強力ナル抗毒素ヲウルコトニ努メ次テ赤痢異型菌ノ毒素ヲ抽出シ志賀菌抗毒素ガ之ヲ中和スル作用アリヤ否ヤヲ定メン事ヲ期セリ。

實驗。

志賀菌培養ヨリ每常家兎ノ盲腸ニ浮腫。出血。潰瘍等ノ惹起ス可キ毒素ヲ得ル條件ヲ研究シタル結果強アルカリ性 Martin ブイオンニ1ヶ月乃至70日培養スル時ハ所要ノ條件ヲ充ス事ヲ知り次表ノ如ク處理セリ (細谷、宮田法)

志賀菌アルタニブイオン陳舊培養濾液 2l (pH 8.2)



精製毒 (I) 又ハ (II) ハ蒸餾水ヲ加ヘ 原毒素量ニ復シタル後 0.25—2 cc. ヲ家兎靜脈内ニ注射スレバ翌日又ハ數日後ニ斃レ 盲腸浮腫出血潰瘍時ニ瘻疽ヲ起シ大腸殊ニ其上端ニ之ノ同様

ニシテ輕度ナル變化ヲ生ジ小腸ハ 屢々充血。浮腫。毛細管性出血孤立濾胞 Peyre 氏板ノ腫脹ヲ見。殊ニ胃粘膜ノ潮紅。出血。糜爛ヲ生ジ小兒赤痢。疫痢ヲ思ハシムルモノアリ。注

射後、日々體溫、體重ヲ測定シ時ニ麻痺ヲ起ス事アリ、屢々肉眼的ニ著名ナル血便ヲ排泄スル事アリ、Benzidin 反應ニヨル潛性出血便ハ每常之ヲ證明セリ。

本實驗ハ數頭ノ家兎ヲ以テセル實驗ニシテ、剖見上著明ナル盲腸ノ變化ヲ現ハセルモノヲ以テ毒素作用陽性トセリ。

以下精製毒(I)ヲ以テセル本毒素ノ性状ニ關スル業績ヲ擧グレバ

1) 耐熱性—80度1時間ノ加熱ニ依リ作用ヲ失フ。

2) 50度以下ノ低温減壓ニ於テ濃縮シ真空乾燥器ニ於テ粉末トナス時ハ其微量モ尙ホ強力ナル作用ヲ有ス。

3) 乾燥粉末トナセル毒素ヲ海砂ト混和シ「エーテル」ヲ以テ11時間浸出スルモ有效成分ハ「エーテル」ニ移行セス。

4) 強アルカリ性溶液ヲ液體脂肪浸出器ヲ用ヒテ「エーテル」ヲ以テ20時間浸出スルモ有效成分ハ「エーテル」ニ移行セス。

5) 硫酸々性溶液ヲ「エーテル」ヲ以テ11時間浸出スルモ「エーテル」ニ移行スル事ナシ。

6) 濃縮シタル本毒素ニ酒精ヲ90%ノ割ニ加フレバ微量ノ沈澱ヲ生ジ、有效成分ハ沈澱ニ移行ス。

7) 本毒素50ccヲ濃縮シテ3ccトシ之ニ同量ノ「ピクロロニ酸熱飽和水溶液」ヲ加ヘ數日放置スレバ Pikrolonat ヲ生ズレドモ有效物質ハ Quantitativ ニ濾液中ニ存在ス即ピクロロニ酸ニヨリテ沈澱セザルモノナリ。

8) 本毒素ヲ50ccヲ20ccニ濃縮シ Digitonin (0.1g)ノ水精(3cc)溶液ヲ加ヘ1日放置スル時ハ有效成分ハ沈澱ノ濾液中ニ存在ス。

9) 本毒素9ccニ過酸化水素(三共:オキシフル)ヲ1ccヲ加ヘ37°C1時間シ馬鈴薯[Katalase]ヲ以テH₂O₂ヲ分解後家兎ニ注射スレバ毒性ハ稍々減少ヲ示シタルニ過ギズ。

10) 本毒素ニFormalinヲ0.4%ノ割ニ加ヘ37°C3日間放置シタルニ共毒力ノ減退ヲ見

ズ。

11) 本毒素ハ透析(硫酸紙ヲ用フ)甚ダ困難ナリ。

12) 本毒素ハ Trypsin 又ハ Takadiastase ニヨリテ破壊セラレズ。

13) 注射部位ト毒作用トノ關係:—靜脈内、門脈内、腹腔内又ハ皮下ニ注射スレバ特異ノ毒作用顯著ナレドモ大量(10—100m.l.d.)ヲ直接ニ小腸、盲腸又ハ肛門ヨリ大腸ニ注入スルモ毒作用ヲ呈スル事ナシ。

14) 家兎小腸粘膜エキスハ本毒素ヲ破壊スル作用ナシ。

15) マウスニ對スル作用:—マウスノ靜脈内ニ注射スレバ家兎ニ對スル m.l.d. 40ノ約8分ノ1量ニテ1日乃至數日ノ潜伏期ノ後定型ノ麻痺ヲ起シテ斃ル腸管ハ屢々充血シ内容ニ血液ヲ混ズル事アリ。

16) 海狸ニ對スル作用:—マウスニ對スル d.c.l. ノ40倍、80倍、120倍量ヲ海狸13ニ靜脈、腹腔内又ハ皮下ニ注射スレバ悉ク4日乃至7日ノ後ニ斃ル此際胃粘膜ノ義膜形成、潮紅、小腸ノ充血ヲ每常證明シ盲腸モ時ニ充血シ、4例ニ於テ此ノ數時間前ヨリ麻痺痙攣等ノ神經症狀ヲ呈セリ。

抗毒素ニ就テ:—陳舊マルタンブイオン培養濾液ヲ以テ馬2頭ヲ數ヶ月間免疫シ、他ノ2頭ハ精製毒(I)ヲ以テ3ヶ月以前ヨリ免疫續行中ナリ是等ノ血清ハ孰レモ500—1000倍稀釋ヲ、本毒素ノ家兎ニ對スル4m.l.d.ト混合シ37°C20分放置家兎ニ注射スル時ハ毒素ハ中和セラル、ヲ見タリ。マウスヲ用フレバ2000—5000倍稀釋血清0.2ccト精製毒(I)ノ8d.c.l.トノ混合液0.5ccマウス靜脈内ニ注射スレバ完全ニ中和セラル、事ヲ認メタリ。對照タル健康馬血清及ビ高價、凝集素ト感染防禦作用ヲ有スル志賀菌煮沸ワクチン免疫馬血清ハ原液ノマ、5ccヲ用ヒテモ全然毒素中和作用ナキ事ヲ確メタリ。

	抗毒素血清	煮沸ワクチン 免疫馬血清
凝集素	—	+++ (1:12, 800)
沈降素	—	+++
感染防禦素	?	+++ (0.001cc)
抗毒素	+++	—

本表ニヨリテ志賀菌ノ產生セル本毒素ハ凝集元、沈降元ヨリ全ク獨立セル抗原ニシテ、抗毒素ハ凝集素、沈降素トハ全然別種ナル抗體ナル事ヲ明確ニ立證シ得タリ。

次ニ志賀菌ノ若キ寒天培養ヨリ本毒素ヲ抽出スル條件ヲ明ラカニシ更ニ赤痢異型菌中駒込Aヨリ家兎ノ消化器系統ニ作用スル毒素ヲ抽出シ得ル事ヲ豫報セリ。又細谷、宮田法トWillstätterノ酵素分離法ト併用シテモ志賀菌ノ本毒素ヲreinigenシ得ル事ヲ知レリ。

終リニ志賀菌培養ヨリ精製セル本毒素ガBiuret反應、Ninhydrin反應ヲ呈セズ、Trypsinニ消化セラレズ免疫學的ニ沈降素(本抗原ニ對スル)產生能力ナキ事ハ本毒素ガ蛋白質ニ屬セザル事ヲ思ハシムルニ拘ラズ抗毒素產生能力ヲ有スル事ハ免疫學的ニ興味アル事實ヲ論ジタリ。

◎寄附金

學友會ヘ下記ノ通り寄附アリタリ。

金70圓86錢也 松井勝冬君
金15圓40錢也 吉積泰君

○三月中職員異動調

昭和5年4月4日傳染病研究所

月日 異動事項 官職 氏名

正 誤 表			
頁	行	誤	正
231	上カラ6	表ハレタコトハナイ	表ハレタ事ハ殆ドナイ
232	第5表	非固有宿主ノ肺ニ	非固有宿主ノ氣管ニ
234	第7表 第二次ノ欄	家兎 No.	モルモット No.

- 4年12.28 昭和4年12月25日付願
 研究生退學ノ件許可ス 仁藤 隆作
- 5年3.1 陸叙高等官五等 技師 遠山 祐三
 3.6 病理學研究ノ爲滿1年間
 獨逸國ニ在留ヲ命ズ
 技手 井上 康平
- 3.10 昭和5年3月10日付願
 研究生退學ノ件許可ス 吉 積 泰
- 3.15 叙從六位 技師 遠山 祐三
- 3.17 大阪府下へ出張ヲ命ズ
 (第8回日本醫學會ニ
 出席ノ爲大阪市へ)所員 二木 謙三
 同 宮川 米次
 同 高木 逸磨
 同 河本 禎助
 同 三田村篤志郎
 同 田宮 猛雄
 同 佐藤 秀三
 同 小島 三郎
 同 細谷 省吾
 技師石原喜久太郎
 同 城井 尙義
 同 山田信一郎
 同 遠山 祐三
- 3.24 醫學部兼勤ヲ命ズ
 教授 三田村篤志郎
- 3.29 和5年3月29日付
 願研究生退學ノ件許可ス
 松本 薫
- 3.29 願研究生退學ノ件許可ス
 三 浦 孚

恙蟲病々原體ノ新證明法

(昭和5年4月第20回)
(日本病理學會演說要旨)

傳染病研究所

長 與 又 郎
田 宮 猛 雄
三 田 村 篤 志 郎
佐 藤 清

恙蟲病ノ可視性病原體トシテ、余等ハ從來主トシテ組織球内ニ見ラル、特殊ノ小體ヲ舉ゲ居レリ。而シテ林博士及石原、緒方兩博士ノ病原體或ハ病原ナラントシテ報告セルモノ、内、或モノハ恐ラク余等ノ報告セルモノト一致スベシト想像シ居ルガ其發見率少ク、未ダ之ヲ首肯セザル論者アリ。余等ハ其後ハ專ラ病原體ノ培養方面ニカヲ注ギ種々考察ヲ重キテ實驗セルガ未ダ確實ナル結果ヲ得ルニ至ラズ。又體外培養法ノ應用ヲモ試ミツ、アルガ之亦今日未ダ特記スベキ成績ニ達セズ。一方余等ハ昨夏以來體內培養ノ意味ヲ以テ家兎ノ眼球ヲ選ビ其眼房水内ニ病毒ヲ注射スルノ法ヲ試ミタリ。此方法ハ曾テ大正7年頃少數ノ兎ニ就テ試ミ一定ノ變化ヲ眼房ニ見タルコトアリシモ深く留意セズ特筆スベキ所見ヲ見ル前ニ有耶無耶ノ裡ニ之ヲ見捨テタリ。然ルニ今回細心ノ注意ト詳細ノ觀察トヲ以テ同方法ニヨル實驗ニ著手シタルニ、始メテ、家兎ガ恙蟲病毒ニヨツテ全然獨特ノ症狀及經過ヲ示ス眼症ヲ起スヲ見、更ニ其眼房水ヲ以テ累代定型的ノ眼症ヲ起サシメ得ルノミナラズ、其組織的檢査、免疫關係、猿ヘノ移植試驗等ニヨツテ此眼症ガ幾多ノ對照試驗トハ明カニ區別シ得ベキ、特殊ノ恙蟲病性眼疾ナルコトヲ確メタリ。

茲ニ於テ昨夏來此眼房内病毒注射法ニ基キアラユル實驗ヲ重キ、興味アル成績ヲ得就中可視性病原體ニ關シ有力ナル新知見ヲ舉ゲ得タルヲ以テ茲ニ之ヲ報告ス。

實驗材料及方法

本實驗ニ使用セル恙蟲病毒ハ下記ノ四系トス。

(1)千葉系、昭和4年6月千葉緒方規雄博士ヨリ分與セラレタル北川系家兎辜丸接

Buchner ノ所説ノ復興ハ未ダソノ假説ニツ
イテ軌範的ナ誤リハ繰リ返ヘサナイガ Buch-
ner 學派ノ集成ハ單ニ人體ニ於ケル免疫學ノ
應用方法ニ過ギナイモノデアツテ、且ツソノ
集成物ノ異ナル種々ノ場合ヲ以テスルモ尙ホ
未ダ過敏症ヤ免疫學的範圍ノ總テノ現象ヲ完
全ニ解説シ得ルモノデモナイ。

而シテコノ Buchner 派ノ學説ニ對シ適切
且ツ信賴ニ値ヒスル立證又ハ反證ヲ擧グルコ
トハ今日ノ免疫學的探究ノ分野ニ於テハ一般
ニ且ツ最モ緊急ヲ要スル問題デアツテ、コノ
一ツノ問題ノ裡ニハ幾多ノ重要ナル臨牀的收
穫ノ胎兒ヲ潜ムルモノデアルコトヲ牢記スベ
キデアル。(完)

雜 報

◎大阪ニ於ケル學友會懇親會

4月上旬、第8回日本醫學會總會が大坂テ
開催サレタノヲ機トシ、在大阪學友會員ノ御
幹旋ニヨツテ4月4日午後6時ヨリ文樂座ニ
於テ觀劇懇親會ガ催サレタ。出席者多數堂ニ
溢レ、開宴ニ際シ所長ニ代ツテ横手教授ノ御
挨拶ガアリ、尙ホ主催地ノ幹事トシテ佐竹、
西兩君ノ御挨拶ガアツタ。文樂ノ人形ハ既ニ
ソノ藝術的價值ニ於テ定評ノアルトコロ、一
同感興ノ湧クガマ、ニ終演ニ及ビ、幹事諸君

ノオ骨折リヲ謝シ又ハ相互ノ健祥ヲ祝シナガ
ラ散會、場外ニ出レバマタ、ク灯ヲカスメテ
工業都市大阪ノ街ニモ辻カラ辻ニソノ春ノ
夜ノ風ガ吹キワタツテキタ。

◎第68回講習會開催

4月11日午前、開講式舉行、所長御差シ支
ヘノタメ城井博士代ツテ講習生一同ニ對シ訓
辭ヲ述ベラル。
講習生氏名下ノ通り。

自昭和5年4月 第68回傳染病學講習生名簿
至同 7月

本籍地	現住所	記事	氏名	生年月日
岐阜縣惠那郡苗木町苗木	愛知縣名古屋市中區南辰巳町 64	愛知醫專 愛知縣防疫醫	小川 浩	明治 30, 8, 19
山形縣最上郡新庄町沼田 226	東京市本郷區森川町1番地 31 號翠月館	東京齒科醫專	舟生 秀夫	38, 3, 30
山梨縣南都留郡船津村 845	東京府豐多摩郡澁谷町美竹 17	同	井出 與七	39, 3, 1
廣島縣安佐郡川内村大字中調子	廣島縣廣島市鐵砲町 137	廣島病院技手	道原 政雄	36, 11, 20
山口縣熊毛郡三丘村字川尻	東京市麴町區3番町 23 番地木澤病院	東京醫專	佐古 正徳	40, 2, 11
大分縣速見郡日出町 2 949	東京市麻布區仲町3番地 小林又市方	日本醫大	吉井 秀雄	41, 11, 29
山口縣吉敷郡嘉川村 6 52 番屋敷	山口縣徳山町戒町 松野品吉方	東京醫專 山口縣防疫醫	河野 悦三	36, 4, 1
千葉縣東葛飾郡船橋町九日市 1, 613	東京市深川區大住町9番地 元木長吉方	千葉醫專 福岡縣檢疫醫	石井 三郎	26, 6, 7
石川縣金澤市味噌藏町中丁 24 ノ 1	東京府下大崎町下大崎 3 13 渡邊方	金澤醫專 石川縣衛生技師	安藤 茂雄	31, 2, 16
愛知縣北設樂郡上津具村中家裏 13	愛知縣名古屋市中區御器所町菱池 32	愛知醫大	村松 楠雄	37, 12, 1
福岡縣入女郡中廣川村大字久泉 603	同上	開業醫	平井 美則	14, 10, 15

沖繩縣首里市眞和志町 2 / 44	大連市清水町1番地	長崎醫專 關東廳海務局技手	眞榮平房雄	明治 29, 8, 17
千葉縣君津郡三嶋村 4 28	東京市下谷區谷中坂町 2 5 三輪方	日本醫專	鈴木 基	36, 10, 10
福岡縣浮羽郡吉井町50 番地 / 1	東京府南足立郡梅島町梅 田 1764	開業醫	藤江 到	22, 5, 20
千葉縣山武郡大和村福 伎 1, 083	千葉縣千葉市千葉 2, 545	千葉醫大附屬藥學 千葉縣技手	岡本 實	41, 1, 26
東京市麻布區竈笥町44	東京市芝區白金三光町 2 63	帝國女子醫專	飯淵かゝる	39, 6, 3
山形縣北村山郡戸澤村 字白鳥	東京市日本橋區通旅籠町 19	日本醫大	仁藤 勝夫	38, 4, 1
京都市上京區下塔之段 町 503	同上	金澤醫專	岩崎 宗雄	33, 6, 13
鹿兒島縣薩摩郡隈之城 村東手 3, 233	臺灣臺中州臺中市老松町 2 / 10	臺中州雇	竹山 健志	38, 12, 6
中華民國浙江省 嘉興縣	東京市本郷追分町 31 第 2 中華學會	北京國立醫專	屠寶 琦	34, 6, 7
東京市下谷區谷中清水 町 20	東京府下入新井町新井町 新井宿皿沼 570	朝鮮總督指定 京城齒科醫學校	松島 直也	33, 9, 23
朝鮮京城府桂洞 147	東京府下品川町北品川 4 50 小澤方	日本獸醫	韓 鐘 相	39, 2, 24
新潟縣南蒲原郡加茂町 字櫻澤	東京府下駒澤町上馬 660 赤間武二郎方	東京獸醫	遠藤 亨一	43, 11, 2
靜岡縣周知郡園田村中 川入 26 / 1	同上	東京獸醫	鈴木 勇	34, 7, 30
朝鮮忠清南道唐津面邑 內里 177	朝鮮慶尙北道達城郡壽城 面新岩洞 1, 276	慶尙北道立 大邱醫學講習所	李 文 世	34, 6, 5
廣島縣蘆品郡福相村大 字相方 48 番屋敷	東京市下谷區谷中眞島町 1 / 3	日本醫大	岡田 一	36, 11, 3
兵庫縣飾磨郡御國野村 御著 860 / 1	東京府荏原郡世田ヶ谷下 北澤 942 平林繁方	日本醫大	天川 政隆	40, 4, 20
茨城縣結城郡安靜村栗 山 334	東京市外大久保町字西大 久保 126	東京醫專	湯本 克巳	39, 8, 3
宮城縣仙臺市東 7 番丁 7	東京市芝區白金三光町 3 05 木村春吉方	長崎醫大 長崎稅關檢疫醫	秋元 穆	34, 12, 10
德島縣那賀郡羽ノ浦町 大字中庄字	東京市芝區白金三光町三 光館	日本獸醫 德島縣衛生技手	西野 幾三	21, 1, 15
奈良縣吉野郡十津川村 奈池 64	東京府荏原郡荏原町戸越 331	日本醫專	中西 滋吉	18, 2, 16
長崎縣長崎市田中町46	長崎縣南高來郡島原町	日本醫專	徳岡 一二	22, 1, 2
群馬縣群馬郡箕輪町大 字松之澤 179	東京府北豐島郡石神井村大 字上石神井字立野 2, 108	日本醫學校	清水 豐馬	24, 9, 26
長野縣北安曇郡廣津村 6545	東京府豐多摩郡中野町 3, 790	開業醫	山本 金作	18, 2, 10
香川縣木田郡川添村下 田井	愛媛縣越智郡四阪島	千葉醫大	横井 彪	37, 1, 7
岐阜縣安八郡三城村萬 石 260	東京市本郷區駒込千駄木 町 50 小瀧方	日本醫大	清水 孝夫	37, 6, 25
鹿兒島縣肝慶郡垂水町 田神 50 番戶	東京府豐多摩郡澁谷町向 山 28	東京帝大 傳研技手	赤塚 京治	34, 1, 15
茨城縣鹿島郡輕野村知 手 2305 番地	茨城縣眞壁郡下館町本城 町 3	東京醫專 茨城縣衛生技師	向山 武次	32, 2, 10
熊本縣熊本市本莊町 3 56	同上	熊本縣防疫監吏	川下 政仁	32, 9, 2
鳥根縣八東郡秋鹿村大 字秋鹿村 3, 603	東京府豐多摩郡中野町 8 62 出雲育英塾	東 帝 大	加藤 英市	37, 12, 24
兵庫縣印南郡東神吉村 1364	東京市本郷區根津須賀町 16 早川方	東 帝 大	田淵 俠介	34, 12, 3

長野縣諏訪郡湊村 369 2番地	東京府豊多摩郡杉並町字 田端 727	東帝大	山岡 克巳	明治 38, 9, 19
鳥取縣日野郡日野上村 453	東京市外濠野川町田端西 臺 630 入澤宗壽方	東帝大	入澤 廉	38, 9, 24
長崎縣東彼杵郡大村町 474	東京府北豊島郡高田町雜 司ヶ谷 740 昌谷方	東帝大	山口 正義	39, 6, 5
廣島縣沼隈郡千年村大 字能登原 963	東京市小石川區指ヶ谷町 28 蓮華寺方	東帝大	寺岡 辰	37, 9, 8
岐阜縣土岐郡土岐町 3 635 / 1	東京市四谷區永住町 2 松浦榮太郎方	東帝大	小栗 一好	37, 6, 12
愛知縣名古屋市西區鹽 町 4 / 26	東京府日暮里町日暮里 1 092 松本エシ方	日本醫大	手塚 悦郎	35, 3, 5
和歌山縣伊都郡笠田町 大字東 1, 519	東京府豊多摩郡大久保町 大字東大久保 東京醫學 專門學校	東京醫專	木村 政長	35, 3, 6
栃木縣那須郡七合村谷 淺見 401	東京府下代々幡町幡ヶ谷 576 小室方	東京醫專 委託學生	小口 亘	38, 12, 20
新潟縣岩船郡關谷村大 字山本二番戶		東帝大 同	市井 正次	27, 6, 16
		千葉醫大 同	白川初太郎	
中華民國福建省福州南 臺 前山九加坊第5號		日本醫大	曾 乘 熙	37, 9, 2

◎學術集談會

4月17日(木)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ
學術集談會開催。演題ハ下ノ2題デアツタ。

1. 血糖量ニ就テ(綜説) 河本 禎 君助
1. 赤痢血清ノ國際的檢定
法(綜説) 細谷 省 吾君
(本誌綜説欄參照)。

◎學友會へ寄附

學友會へ下記ノ通り寄附アリタリ。

- 金71圓88錢也 外田 麟 造君
金105圓26錢也 上垣 新 吾君

四月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
3.31	依願傳染病研究所治療研 究業務囑託ヲ解ク		仲田 一信
„ „	依願免本官	技手	櫻井信太郎
„ „	昭和5年3月31日附願		

	研究生退學ノ件許可ス	白井 豹
4. 1	昭和5年4月1日附願研 究生繼續ノ件許可ス	中山 二郎
4. 9	昭和5年4月8日附願研究 生入學ノ件許可ス	中島 勝美
4.15	昭和5年4月14日附願 研究生退學ノ件許可ス	中田善之助
4.17	山梨縣下へ出張ヲ命ス	教授 高木 逸磨
4.18	傳染病研究所ニ於ケル治 療研究業務ヲ囑託ス	入澤 廉 加藤 英市 野上 隆 田淵 俠介 寺岡 辰 山口 正義 山岡 克巳
„ „	同	
„ „	同	
„ „	同	
„ „	同	
„ „	同	
4.21	朝鮮へ出張ヲ命ス	技手 笠井 久雄
4.22	支那へ出張ヲ命ス	教授 宮川 米次
4.25	研究生入學ノ件許可ス	佐々木英一

網狀織内被細胞機能検査法 (Adler & Reimann) に對スル疑義

東京帝國大學傳染病研究所

第七細菌血清學部 (主任 佐藤教授)

醫學士 武 田 德 晴

目 次	就 テ
緒 言	第四章 膠質銀注射ノ前處置ニ依ル血行中
實驗方法	Congorot ノ消失ニ及ボス影響ニ就
第一章 正常家兎ニ就キ血行中ヨリ Congo-	テ
rot ノ消失曲線竝ニ消失直後ニ於ケ	第五章 脾臟別出ノ血行中 Congorot ノ消失
ル同色素ノ体内分布ニ就テ	ニ及ボス影響ニ就テ
第二章 肝臟ノ Congorot 排泄状態竝ニソノ	第六章 總括竝ニ考察
排泄量ニ就テ	結 論
第三章 總輸膽管結紮竝ニ膽汁排泄障碍ノ血	主ナル文獻
行中 Congorot 消失ニ及ボス影響ニ	

緒 言

抑モ網狀織内被細胞ノ機能検査ヲ、ソノ異物攝取ノ度ヲ以テ知ラントスル企ハ、Eppinger & Stöhr⁽¹⁾ニ始ル。同氏等(1922)ハ Ferrum Saccharatum ヲ瀕死ノ患者ニ靜脈内ニ注射シ、死後肝、脾、淋巴腺、骨髓等ノ網狀織内被細胞ヲ檢シ、ソノ攝取度ハ、同細胞ノ機能状態ノ一ツノ表レト解シタ。

ソノ後 K. Paschkis(1924)⁽²⁾ハ同様ノ考案ヲ實驗的ニ家兎ニ試ミ Vaccination ノ後ニ於テハ、脾臟ノ網狀織内被細胞ハ、Carmin ノ攝取度ノ少キコトヲ報告シテ居ル。

次イテ Saxl and Donath(1925)⁽³⁾ハ、ヤハリ同様ノ考案テ、脂肪浮游液ヲ靜脈内ニ注射シ、血液内ニアル同脂肪浮游液ノ消失ヲ以テ網狀織内被細胞ノ攝取度トシ從テ同細胞ノ機能ヲ檢シ得ルトナシタ。

Adler & Reimann(1925)⁽⁴⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾ハ Congorot 溶液ヲ靜脈内ニ注射シ、血液内ニオケル同色素ノ消失度ヲ以テ同様同細胞ノ機能ヲ檢シ得ルトナシタ。

Winterniz(1925)⁽⁵⁾ハ Adler & Reimann ノ法ヲ臨牀的ニ試ミ、同時ニ Urobilinämie ヲ檢シ、兩者ノ成績ハ稍ク一致スルヲ見タ。從ツテ Unobilinämie モ同細胞ノ機能低下ヲ意味スルモノデアルトナシタ。

尙 Rosenthal⁽⁶⁾ノ Phenoltetrachlorphthalein ノ肝臟機能検査法モ Adler & Reimann ノ Congorot 法ト同様ノ意味テ、コノ検査法ノ一ツニ屬セシメントスル人モアル(Benda)。

以上記載ノ検査法ハ、何レモ網狀織内被細胞ノ一機能ナル異物攝取ヲ以テ標準トセントスル點ニ於テハ同一デアル。而シテ、比較的操作ガ簡便デアツテ、生前ニ網狀織内被細胞ノ機能ヲ知

Stern.

著者等ニヨレバ健康體ノ血清ノウチニモ亦癌患者ノ血清ノウチニモ同様ニ癌融解物質ノ存在スルコトヲ唱ヘテキル。然ルニモ拘ラズ癌患者ノ血清ガ癌細胞ヲ破壊シナイト云フノハ癌血清ニハ他ニ一ツノ Factor ガアルカラデア。ソレハ細胞ヲ保護スル物質デアツテ、癌融解物質ノ作用ニ對シ積極的ニ且ツ滅殺的ニ働クモノデア。ル。

著者等ハ是等二ツノ物質ノ拮抗作用ヲ觀察シテ、ソノ成績ヲ曲線ヲ描イテキル。試験ノ方法トシテハ各試験管ノ癌細胞浮游液ノ含量ヲ一定ニシ、血清ノ注加量ヲ遞増シテ癌細胞融解ノ成績ヲ求メテキル。被檢血清ハ次ノ比ニ加ヘル。

1:1, 1:5, 1:10, 1:20

コノ方法テ健康血清ヲ檢スレバ曲線ハ上昇ノ一途デア。癌患者ノ血清テハ1:5, 1:10マデノ試験管テハ増加ノ曲線ヲ示サガ、シカシソレ以上ノ血清混和量テハ再び減少ノ曲線ヲ呈スルモノテ殊ニ1:20ノ試験管ハ平均零トナル。コノ一旦増加ヲ示シタ融解現象ガ再び減少シテ絶對ニ融解能零トイフワケテハナイ

ガ、マツ平均零ト認ムベキ下降ヲ示スコトハ癌血清ノ一ツノ特徴ト認ムベキモノデア。對照トシテ他ノ血清ニ就テモ觀察シテ居ルガ、ソノウチ數種ノ血清テ全然融解能力ヲ缺イテ平均零ノ線ト同様ノ状態ヲ呈スルモノガアツタガ、是等ハ主トシテ婦人ノ血清テ妊娠8—9ヶ月ノモノデアツタ、ソシテ、癌患者ノ血清テハ、ソノ様ナコトハ1例モナカツタ。

更ニ、コノ細胞融解物質ハ、ソレニ對スル拮抗性物質ト同様ニ癌細胞ニヨツテ吸著サレル。然シ拮抗性物質即チ細胞保護物質ハ融解物質ニ比ベテ速カニ吸著サレル。ソレテ、コノ保護物質ノ吸著速度ノ迅速ナル點ヲ利用シテ癌血清ヲ丁度健康血清ノ融解状態ト同シヤウニ變化サセルコトガ出來ル。

最後ニ、コノ實驗ノ診斷的價値ノ問題デア。ルガ、モシ比較的良性ノ皮膚上皮膚腫ヲ除外スレバ癌患者血清ノ全例ニ於テ正常血清ノ如キ融解作用ヲ示シタモノハ1例モナカツタ。尙ホ又、臨牀的所見テハ癌ヲ認メ得ナカツタ血清テ癌血清特異ノ曲線ヲ呈シタモノガ數例アツタ。(了)

雜 報

◎ 學術集談會開催

5月22日(木)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ近ク海外ニ出張サレル石原教授ソレカラ新潟醫大京城帝大へ夫々榮轉サレル西部、中村兩博士ノ送別ヲ兼テ學術集談會ヲ開催シ午後5時散會。演題ハ次ノ4題デアツタ。

1. インヴェルチンノ免疫學的研究

松岡一馬君

2. 家兔靜脈内ニ注入セラレタル「コン

ゴー赤溶液ノ分布ト消失過程殊ニ

ソノ網狀織内皮細胞ニヨル顆粒狀

攝取要約ニ就テ 武田徳晴君

3. 鷺口瘡菌ニ關スル知見補遺

平野忠七君

4. 傳染病ノ牛乳ニヨル流行(綜説)

野邊地慶三君

◎ 石原、西部、中村三君ノ送別會

學術集談會開催當日、引キ續キ午後6時ヨリ所内食堂ニ於テ上記三君ノ送別會ヲ開ラク、出席者堂ニ溢レル、幹事城井博士ノ挨拶、長與所長ノ送別ノ辭、續イテ主賓ノ挨拶ニ移リ西部、中村兩君ハ各々巢立チ行ク壯者ノ意圖ヲ述べ海外へ進出サレル石原教授ハ抱負ノ一端ヲ語ラレル。カクシテ送ル人、送ラル、

人、ビール」ノ満ヲツクシ、夜ニ入ラントシテ散會。

教授 石原喜久太郎

◎ 學友會へ寄附

學友會へ下記ノ通り寄附アリタリ。

金 17 圓 58 錢也 山田 信 一 郎君
金 7 圓也 大 住 義 次君
金 300 圓也 本 多 良 靜君

五月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
4. 18	昭和5年4月18日付願 研究生繼續ノ件許可ス		正津 正榮
..	傳染病研究所ニ於ケル 治療研究業務囑託ヲ解 ク		小林 茂雄 眞鍋 清明
..	任傳染病研究所技手		小林 茂雄 眞鍋 清明
4. 23	..		小栗 一好
..	支那へ出張ヲ命ズ	技手	岡西順二郎
4. 30	傳染病研究所「 <u>ウイルス</u> 」 病研究業務囑託ヲ解ク		武田 和子
..	傳染病研究所公衆衛生 學講習業務ヲ囑託ス		山岸 精實
5. 1	傳染病研究所ニ於ケル 破傷風毒素研究業務ヲ 囑託ス		大村 重光
..	歐米各國へ出張ヲ命ズ		

5. 2	昭和5年4月23日付願 研究生入學ノ件許可ス		大出 富吉
..	昭和5年4月24日付願 研究生入學ノ件許可ス		江良 一雄
..	昭和5年4月30日付願 研究生入學ノ件許可ス		矢浪 季一
..	昭和5年5月1日付願 研究生入學ノ件許可ス		南 茂夫
5. 3	朝鮮へ出張ヲ命ズ	技手	矢追 秀武
5. 7	醫學博士ノ學位ヲ授與 セララル	囑託	淺田 順一
5. 14	任新潟醫科大學教授 叙高等官六等		西部増治郎
5. 15	依願傳染病研究所ニ於 ケル「コレラ」研究業務 囑託ヲ解ク		柿原 長雄
5. 19	依願免本官	技手	滋賀 秀俊
5. 21	依願傳染病研究所ニ於 ケル病理學研究業務囑 託ヲ解ク		西部増治郎
5. 26	東京府下へ出張ヲ命ズ	技手	眞柄 正直
..	..	同	岸田 秋彦
..	..	囑託	中村丑之助
..	..	同	稅所 篤良
5. 31	昭和5年5月31日付願 研究生退學ノ件許可ス		平野 忠七

第十四卷第五號楊氏論文正誤表

頁	行	誤	正
509	下ヨリ第十行	同ツテ併行	向ツテ竝列
515	上ヨリ第十六行	貪食セラレタル赤血球	貪食セラレタ 白血球
515	下ヨリ第八行	有後赤血球	有核赤血球

是等ノ實驗ヲ綜合シテ即チ次ノ結論ヲ導イテキル。即チ Depotinjektionsmethode ヲ應用シテ人ノ皮膚ニ實驗的過敏性ヲ賦與スルコトガ出來ル。アル種ノ物質デハ單純ニ、ソノ物質ノミデモ出來ルガ化的製品ニアツテハ Schleppeper ヲ加フルコトニヨツテ感作ノ目的ヲ達セラレル。コノ Schleppeper トシテハ著者等ノ實驗デハ膏ニ血清ノ如キ蛋白又ハ蛋白様物質

ニ限ラズ、「ヒヨレステリン葡萄糖ノ如キモノモ用ヒラレル。

皮膚ノ感作ハ先ヅ Depotstelle ノ近接部ニ始リヤガテ全身ニ擴ガル。而シ Depotmethode ヲ反復繰リ返ヘシテキル間ニ皮膚ハ脱感作ノ状態トナツテ來ル。而シテコノ脱感作ノ出現モ Depotstelle ノ周圍ニ始マツテヤガテ全身ニ及ブモノデアアル。(了)

雜 報

學術集談會開催

6月19日(木)午後1時半ヨリ所内講堂ニ於テ定例學術集談會ヲ開催シ午後3時散會。演題ハ次ノ二題デアツタ。

1. Bakterienanaphylatoxin ニ關スル知見補遺 (主トシテ Bakterien-anaphylatoxin 產生機轉ニ關スル實驗的研究)
菅野拓三君
2. 水産ト其ノ防疫ニ關スル業績(綜説)
遠山祐三君

◎講習生茶話會

學術集談會當日午後4時ヨリ所内食堂ニ於テ今期第68回講習生一同ト所内講師トノ懇親茶話會ガ開カレ。席上官川教授ノ支那漫談ガアツテ散會。

學友會へ寄附

學友會へ上記ノ通り寄附アリタリ。

- | | | |
|---------------|-------|----|
| 金 150 圓也 | 青 柳 | 豐君 |
| 金 100 圓也 | 仁 藤 隆 | 作君 |
| 金 50 圓也 | 關 口 三 | 郎君 |
| 金 146 圓 21 錢也 | 長 瀬 龜 | 一君 |
| 金 16 圓 24 錢也 | 吉 積 | 泰君 |

6 月中職員異動調

昭和5年7月1日 傳染病研究所

月日	異動事項	官 職	氏 名
5.31	傳染病研究所ニ於ケル血清製造研究業務ヲ囑託シ手當1ヶ月金50圓給與		澤野 秀作
5.31	昭和5年5月31日付願研究生退學ノ件許可ス	研究生	平野 忠七
6. 1	昭和5年5月31日付願研究生繼續ノ件許可ス	研究生	宮澤 國丸
6.11	任京城帝國大學教授	敘高等官六等	技 手 中村 敬三
6.16	陸敘高等官二等	教授	三田村篤志郎
„ 同	„	教授	河本 禎助

雜 報

講習生ノ謝恩會

7月1日午後5時ヨリ東京會館テ講習生ノ謝恩會ガ催サレタ。講師一同モ招待ニ與ツテ出席。饗應ノ後、茶ノ卓ニ移ツタ一同ハ所長ヲ始メトシテ二木教授、宮川教授等ノ「ユーモラス」ナ經世談ニ聽キ入ル。日本現時ノ風潮ヲ如何ニ見ルカノ「テーマ」デアアル。ソノ悲觀說ニ對シテ河本教授ノ横槍ガハイル。將來ヲモツ講習生達ニハフサソシイ漫談デアアル。漫談テハアルガ考ヘサセラレル漫談デアアル。カクテ9時過ギ漫談ノ幕ハ下リタ。

講習終了式舉行

7月10日午前11時、所内講堂ニ於テ第68回講習終了式舉行。先ヅ講習主任高木教授ノ開式ノ辭ガアツテ、長與所長證書ヲ授與サレル。次イテ所長ハ下記ノ訓辭ヲ述ベラレ。講習生總代ノ謝辭アツテ式ヲ終ル。式後、記念ノ撮影ヲスマシ、常例ニヨリ講師講習生一同打チ揃ヒ所内食堂ノ清宴ニ臨ム。卓ヲ繞ツテ一同ビールヲ乾ス。歡談數刻ノ後證書ヲ手ニシタ終了生ハ奮闘ノ將來ヲ期シツ、喜色滿面。三々五々退場、宴ヲ閉ヅ。

長與所長ノ訓辭要旨

講習ノ終了ニ際シテ一言述ベル：

コノ講習ハソノ期間ニ於テハ決シテ長イトハ言ヘナイ。唯然シ短期ナリト雖モ諸君ガ終始眞摯ナル態度ヲ以テ臨マレタルコトハ必ラズヤ將來成果ヲ嚮ラスモノト信シ欣快ノ至リデアアル。

アル機會ニ於テ「物事ヲ識ルコトハ常ニ長イコトデアアル」、シカシ一步ヲ進メテ、ソノ眞態ヲ把握スルコトハ最も必要デアアル。コノ意味ニ於テ講習終了ノ機ニ臨マレタル諸君ハ、

コノ際講習ノ過程ヲ顧ミテ講習中ノ收穫ヲ吟味シテ置カレルコトが必要デアアル。

今日ノ學術ハ正ニ日新月歩デアアル。ソレニ遅レザラントスルニハ讀書ハ最も緊要ナコトデアアル唯シカシ、一言ニ讀書ト云フモ、ソレニハ種々ノ方法ガアル。或ハ廣ク淺ク讀ミ、或ハ狹ク深く讀ム。シカシ之ハ勿論ソノ人ノ性格ヤ境遇ニヨツテ定マルベキモノデアアルカラ各自ハヨロシク自ラヲ顧慮シテソノ就クベキトコロヲ選ブベキデアアル。

願フテ、コノ講習ハ極メテ短期デアツテ、コレダケヲモツテ充分ニ諸君ノ將來ニ於ケル進展ニ資スルコトハ難事デアアル。唯シカシ、コノ機縁ヲ以テ將來永久ニ、コノ研究所ハ諸君ノ疑問ニ應ジ諸君ノ努力ニ鞭撻スルコトヲ惜マナイ。未ダ黎明ノ實情ニアル日本ノ衛生ハ、ソノ百般ニ互ツテ諸君ノ奮闘ヲ要求スルデアラフ。ソノ時、コノ研究所ハ本邦衛生向上ノ爲メ諸君ヲ應援スルニ吝カナルモノテハナイ。

講習生諸君ノウチニハ中央及ビ地方官廳ノ勤務又ハ開業醫ノ方々ヲ含ムガ、特ニ地方在住ノ人ニアツテハ、ソノ地方ノ地方病ニ就テハ常ニ研究的態度ヲ以テ臨マレンコトヲ切望スル。殊ニソレ等ノ方々が日常坐臥ノ間ニ看取サレル所見ハ、未ダ不明ノ裡ニ在ル地方病ニ關スル學術上ノ大問題ヲ解決スル秘鍵トナルカモ知レナイ。尙ホ又地方ニ於テハソノ豫防法ノ確立ニ對シテモ必ラズ資スルトコロ大ナルモノ、アルコトヲ信ズルモノデアアル。

次ギニ衛生方面ニ就テ一言スレバ日本ニ於テハ今ヤ衛生學トシテハ相當ニ發達ノ跡ヲ認メルコトガ出來ル。而シナガラ衛生施設其他一般ノ實際ニ就テハ未ダ幼稚ノ域ヲ脱スルコトハ出來ナイ。衛生ノ實際トシテハ唯單ニ上

水、下水ノ問題バカリテハナイ。今日コノ方面ニ於ケル契緊ノ大事ハ即チ衛生思想ノ普及ト向上デアル。即チ諸君ハ公ニアルト私ニアルト尙ホ又臨牀ニアルト研究ニアルトヲ問ハズ。常ニ自ラ衛生學者トシテノ自覺ヲ以テ社會ニ臨マレ度イ。特ニ各自ハ一般社會ノ家庭的衛生施設ニ對シ又家庭的衛生問題ニ對シテ充分ニソレ等ノ相談相手トナラレルヤウ努力サレンコトヲ望ム。

今ヤ諸君ハ芽出度ク講習ノ業ヲ終了セラレタソシテ諸君ハ醫學衛生ニ於ケル一ツノ新勢力トナラレルモノデアル。コノ機ニ際シテ人格ノ修養ト學問ノ勉勵トヲ御願ヒ申シ更ニ諸君ノ健在ヲ衷心カラ祈ルモノデアル。

最後ニ私ハ勉強ガ如何ニ我々ニ必要デアルカニ就テノ偶話ヲ述ベテ置キ度イト思フ。

Hansemann ト云フ人ハ病理學者デアツテ殊ニ腦ノ研究ニ造詣ガ深ク兼テ骨相學ニ親シダ人デアルガ、コノ人ハ天才ヲ三種ニ分ケテキル。

第1ハ一時的天才デアル。即チ身心ノ快適ニ乘シ又酒盞等ノ興ニ驅ラレテ偶々凡人未到ノ言動ニ及ブモノデアル。尙ホコノ他、心外ノ絶景ニ臨ミ、或ハ馥郁タル花ノ香リニ接シ、或ハ又妙ナル音樂ノ調律ニ感ジテ茲ニ天才ノ閃メキヲ示スモノデアル。コノ種ノオバ即チ受働的ノ天才トデモ稱スベキモノデアル。

第二ハ先天的ノ天才デアル。コレニ屬スルモノハ例ヘバ未ダ幼若ニシテ而カモ神韻ヲ含ム樂譜ヲ作り又ハ音樂ノ妙手トナル。シカシテコノ種ノ天才ハ中途ニ挫折スルモノガ多ク、藝術方面ニ於テ之ヲ認メル。

俚諺ニ曰ハク、10テ神童 20テ才子 40,50ハ唯ノ人。這般ノ機微ヲ穿ツテ面白イ言葉デアル。第3ハ即チ後天的天才トデモ稱スベキモノデ、コノ種ノ天才ハ政治家、軍人、實

業家、學者ニ見ラレル。而シテコノ天才ハ言葉ヲ換フレバ勉強ノ天才デアル。近世細菌學ノ鼻祖デアル「パストウル」ニハコノ種ノ天才ヲ認ムルコトガ出來ル。即チ大勉強ヲ續ケテ最後ニ大成ノ域ニ達スル非凡ノ天才デアル。獨逸ノ詩聖グーテハ「天才ト云フモノハナイ、勉強ソレガ天才デアルト言ツテキル。

ソレテ考フルコトハ即チ私共ハ極メテ平凡ナ一人デアル。然シナガラ不撓不屈ノ勉強ヲ續クルニ於テハ天才トナルコトガ出來ル。コノ事ヲ考フレバ諸君モ共ニ常ニ健全ニシテ不斷ノ勉強ヲ積ミ以テ大成ノ目標ニ邁進サレンコトヲ切望シテ歇マナイ次第デアル。

(文責筆者)

學友會へ寄附

金 22 圓 10 錢也	佐藤 秀三君
金 10 圓 6 錢也	武田 徳晴君
金 32 圓也	岡田 良一君
金 3 圓 20 錢也	富澤 武雄君

7 月中職員異動調

昭和5年8月1日 傳染病研究所

月日	異動事項	官職	氏名
6. 2	叙從四位	技師	城井 尙義
6.30	神奈川県下へ出張ヲ命ス	技手	眞柄 正直
6.30	同	同	岸田 秋彦
7. 7	青森縣下へ出張ヲ命ス	技手	宮下 義信
7. 8	昭和5年7月8日付願 研究生繼續ノ件許可ス		下平 尙
7.15	千葉下へ出張ヲ命ス	技師	遠山 祐三
7.22	同	同	遠山 祐三

雜 報

學友會へ寄附

學友會へ下記ノ通り寄附アリタリ。

金 116 圓也	白 井	豹君
金 25 圓 2 錢也	武 田 德	晴君
金 50 圓也	松 岡 一	馬君
金 14 圓 9 錢也	細 谷 省	吾君
金 300 圓也	倉 重 芳	嗣君

八月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏 名
7. 1	叙正五位	教授	三田村篤志郎

7. 1	叙正五位	教授	河本 禎助
8. 2	昭和5年8月1日付願		
	研究生入學ノ件許可ス		村松 楠雄
”	山形縣下へ出張ヲ命ズ		
		技手	天神 智
”	昭和5年8月2日付願		
	研究生繼續ノ件許可ス		佐藤猪一郎
8.23	三重縣下へ出張ヲ命ズ		
		技師	城井 尚義
8.27	醫學博士ノ學位ヲ授與		
	セラル	技手	新免 勝

シタモノデアツテ。コノ際症状ノ喚起サレタノハ。コノ時期デハ未ダ病勢ガ膏盲ニ入ツテキナイモノデアアル。

コノ實驗テ最モ良結果ヲ與ヘタモノハ乳癌皮膚癌 腺癌。肉腫デアツタ。

最後ニコノ方法モ Provokationノ應用ニヨツテ改良サレタケレドモ。癌ノ早期診斷トシテハ不十分デアアル。シカシ他ノ癌反應デモ。コノ Provokationヲ應用シテ困難ナル癌診斷ヲ。ヨリ精密ニセンコトヲ提唱スルモノデア

ル。

(コノ論文ハ

I. Teil: Interferometrische Untersuchungen bei Krebskranken. E. Lendel.

II. Teil: Experimenteller Beitrag zur Interferometrie. S. Beck u. E. Lendel.

III. Teil: Die diagnostische Provokation des Cerzinoms. S. Beck.

ノ三章カラナルモノデアアルガ。特ニ第三章ノミヲ抄出シタ)。

雜

報

○9月15日(月曜)第69回講習(公衆衛生學)開講。

○9月25日(木曜)午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ定例學術集談會ヲ開催シ。演題ハ次ノ三題デアツタ。

1. 精製毒素(破傷風及デフテリー)ヨリ出發セル「アナトキシ」ニ就テ

細谷省吾君

高田眞君

寺尾秀三君

2. 化學的療法ニ關スル諸考察(綜説)

佐藤秀三君

3. 約2年間アマゾンニ於ケル體驗談

松岡冬樹君

學友會へ寄附

學友會へ下記ノ通り寄附アリタリ。

金6圓99錢也 丸山幸太郎君

九月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
8.27	醫學博士ノ學位ヲ授與セラル	技手	新免勝
8.30	小野ト改姓	研究生	下瀬忠則
8.31	依願免本官	技手	眞柄正直

8.31 昭和5年8月31日付願 研究生退學ノ件許可ス

工藤 祐三

9.1 依願傳染病研究所ニ於ケル細菌免疫學研究業務囑託ヲ解ク

松岡 一馬

.. 傳染病研究所ニ於ケル細菌免疫學研究業務ヲ囑託ス

手塚 悦郎

.. 昭和5年9月1日付願 研究生繼續ノ件許可ス

糸井 一良

9.2 福岡縣下へ出張ヲ命ス

技手 菊池 常雄

.. 千葉縣下へ出張ヲ命ス

囑託 島崎 正雄

9.4 公衆衛生學研究ノ爲滿1年間亞米利加合衆國ニ在留ヲ命ス

技師 遠山 祐三

9.11 昭和5年9月11日付願 研究生繼續ノ件許可ス

内田 顯義

.. 三重縣下へ出張ノ序ヲ以テ愛知縣下へ出張ヲ命ス

技師 城井 尙義

.. 京都、大阪、兵庫、廣島ノ二府二縣下へ出張ヲ

- | | | | | | | | |
|------|------------|----|-------|------------|------------|-------|-------|
| | 命ス | 技手 | 菊池 常雄 | 府中野町へ出張ヲ命ス | | | |
| 9.15 | 三重、愛知ニ縣下へノ | | | 技手 | 菊池 常雄 | | |
| | 出張ヲ免ズ | 技師 | 城井 尙義 | 9.28 | 石川縣下へ出張ヲ命ス | | |
| 9.16 | 京都、大阪、兵庫、廣 | | | | 囑託 | 島崎 正雄 | |
| | 島ノ二府ニ縣下へ出張 | | | „ | 神奈川縣下へ出張ヲ命 | | |
| | ノ序ヲ以テ愛知縣下へ | | | | ス | 技手 | 菊池 常雄 |
| | 出張ヲ命ス | 技手 | 菊池 常雄 | 9.30 | 朝鮮へ出張ヲ命ス | | |
| 9.19 | 購入馬匹検査ノ爲東京 | | | | 技手 | 笠井 久雄 | |
| | 府目黒町及世田ヶ谷町 | | | „ | 千葉縣下へ出張ヲ命ス | | |
| | へ出張ヲ命ス | 囑託 | 島崎 正雄 | | 技手 | 菊池 常雄 | |
| 9.27 | 購入馬匹検査ノ爲東京 | | | | | | |

Von O. Kirchner.

著者ハ Milochevitch ト別ニ Aspergillus-filtrat ノ作用ト Fermentwirkung トノ關係ヲ探索シ論及シテキル。特ニソノ實驗ノ中テ Aspergillus Kultur ノ經過日數ト作用トノ關係ヲ檢シタノニ 11—16週間培養ノ濾液ハ既ニ Timotheebacillus ニ及ボス作用ハ消失スルガ 2½—5週迄ノ間ノモノハソノ間何等ノ相違ヲ認メナイシ。8日目ノ培養テ既ニ作用ヲ現ハ

スコトラ認メタ。即チ之等ノ實驗ハ Timotheebacillus ノ抗酸性度ノ減弱ト。之ノ Kultur ノ酵素作用トガ關係ヲ存スルコトノ證左トナルモノトシテキル。尙ホ又 Agar ヤ Glycerinagar ニ移植シタ實驗ヲ行ツテキルガ特記 スルコトハナク。Milochevitch ノ實驗ヲ確カメタニ過ギナイテ。一旦消失シタ菌ノ抗酸性ヲ恢復サセルマデニハ行カナカツタ。

雜 報

◎學術集談會開催

10月13日(木)午後一時ヨリ 所内講堂ニ於テ學術集談會開催演題ハ次ノ3題デアツタ。

1. 腸管粘膜ニ及ボス細菌性毒素ノ影響ニ關スル實驗的研究殊ニ腸管粘膜ニ於ケル「アレルギー反應」ニ就テ
柳澤 徳義君
2. 精製痘苗ヲ以テスル人體皮下接種成績ニ就テ
矢追 秀武君
3. 細胞ノ微細構造ニ就テ(綜説)
三田村篤志郎君

○學友會へ寄附

學友會へ下記ノ通り寄附アリタリ。

- 金 212 圓 94 錢 青 柳 豊君
- 金 110 圓 55 錢 關 口 三 郎君
- 金 200 圓也 池 田 清君

十月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏 名
10.7	岩手縣下へ出張ヲ命ス		

	教授	宮川 米次
”	東京府下へ出張ヲ命ス	
	技手	岸田 秋彦
”	同 囑託	山岸 精實
10.9	昭和5年10月11日付 願研究生繼續ノ件許可 ス	中島義四郎
”	千葉縣下へ出張ヲ命ス	
	技手	菊池 常雄
10.13	昭和5年10月11日付 願研究生入學ノ件許可 ス	齋藤 龍三
10.15	陞叙高等官二等 教授	田宮 猛雄
”	静岡縣下へ出張ヲ命ス	
	技手	川島 四郎
10.21	神奈川縣下へ出張ヲ命 ス	囑託 山岸 精實
”	埼玉縣下へ出張ヲ命ス	
	技手	岸田 秋彦
”	同 囑託	山岸 精實

利用測定ノ方法トシテハ不確實デアツテ實用ニ適シナイ。

3. Myco. leprae Mannitolbroth, Myco. Chelonei ノ Glucosebroth, Myco. phlei ノ Mannitolbroth ニ於テ呈セル夫々ノ反應曲線ハ少クトモコノ實驗ニ使用シタ他ノ菌株トノ鑑別トナル。

4. plainbroth 及ビ Carbohydrate broth ニ於ケル反應ノ變化ハコノ種細菌ニ於テハ一般ニ漸進的ニ alkali ニ向フモノデアアル。

5. 直接ノ定量法ニヨツテ示サレタ通りニ。コノ種ノ研究ハ更ニ廣ク細菌ノ含水炭素利用ニ就テ爲サルベキデアアル。

6. plainbroth ト Carbohydrate broth トヲ問ハズ培地ノ Alkali 性ノ増加ハ培地内ニ於ケル Ammonia ノ増加ト同時ニ來ルモノデアアル。

7. Ammonia ノ產生ハ明カニ利用サレ得ベキ含水炭素ノ存在ノモトニ於テ產生サルベキモノヨリモ少量デアアル。

8. 培地ノ種々ナル Ammonia 含量ハ直接 PH ノ變化トナツテ現ハレル而シテ培地ニ含まレテキル Ammonia ハ同一細菌デハ含水炭素含有ノ培地デモ亦含有シナイ培地デモ殆ンド同一デアアル。

9. 利用サルベキ含水炭素ノ存在ハ培地ニ於ケル反應ノ變化ニ對シテ直接ノ影響ヲ與ヘナイ唯コノ含水炭素ハ細菌ニヨル蛋白ノ分解産物ノ存在スルトキダケ反應ニ影響ヲ與フル

モノデアアル。ソレ故含水炭素カラノ分解産物ハ其ノ蓄積ニヨツテ反應ニハ影響スルコトハナイ。コノ點ハ他種細菌ト異ナル點デアアル。

10. 實驗ニ用ヒタ菌株ニヨル細菌ノ含水炭素利用ハ全然含炭素ノ消失スルマテ漸次減少スルコトガ特徴デアアル。ソレ故他ノ細菌ノヤウニ含水炭素ノ分解ニヨツテコノ種ノ菌ノ發育ヲ抑制スルヤウナコトハナイ。

11. 無水炭酸ノ產生ハ細菌ノ發育ニ從ツテ種々デアツテ夫レハ含水炭素ヲ含ンデキル培地デモ含マナイ培地デモ同様デアアル。然シ又一方ニ於テハ無水炭酸ノ產生ハ含水炭素ヲ含メル培地デハ其ノ含水炭素利用ノ程度ニヨツテ種々デアアル。

12. 培養壺ノ中ニ水酸化バリウムヲ入レテ置テモ細菌ノ發育ヲ抑制シナイ。

13. コノ種細菌ハ嫌氣性ノ状態デハ發育シナイ。

14. 含水炭素利用ニヨル酸分解産物ハ種々ノ濃度ニ含水炭素ヲ含ンデ居ル培地デモ亦必要ナ酸素ヲ種々ノ量ニ含ンデキル培地デモ何レモ少シモ證明スルコトハ出來ナカツタ。

15. 前回ノ報告ニ於テ推測シテ述べタコト即チ全然含水炭素分子ガ作用ヲ受クルモノナラバ夫レハ全ク無水炭酸ト水トニ酸化サレテバナラヌ。ソウシテ培地内デハ中間産物ノ蓄積ハ無イ筈デアアル。然シコノ實驗ノ所見ハコノ種微生物ノ含水炭素利用ニ就テ明ラカニ説明スルモノデアアル。

雜

報

◎群靈祭執行

11月8日正午ヨリ例年ノ通り群靈祭舉行セラレ。式典後新築ノ大動物採血舎ニ於テ饗宴アリタリ。

◎學術集談會開催

11月20日午後1時ヨリ所内講堂ニ於テ學

術集談會開催。演題ハ次ノ3題ニ加フルニ當日上京ノ井上博士ヲ加ヘテ四題デアツタ。

1. 痘原體補體結合反應ニ就テ

中島義四郎君

2. 全國民醫療要求量算出ノ試ミ

佐藤 秀三君

3. ミクルルギー及ビ其應用ニ依ル研究ノ

梗概(綜説) 中 島 壽君
 4. 癌ノ本態ニ關スル知見
 井上善十郎君
 以 上

.. 同 囑託 山岸 精實
 11.7 細菌血清學研究ノ爲獨
 逸國ニ在留ヲ命ス
 技手 矢追 秀武

○學友會へ寄附

學反會へ下記ノ通り寄附アリタリ。
 金2圓6錢 加賀谷喜市君
 金140圓15錢 平野忠七君

11.10 宮城縣下へ出張ヲ命ス
 囑託 中村二三郎
 11.11 暹羅國へ出張ヲ命ス
 技師 山田信一郎

○十一月中職員異動調

月日	異動事項	官職	氏名
10.26	岩手縣下へ出張ヲ命ス	囑託	島崎 正雄
11.1	兵庫縣下へ出張ヲ命ス	教授	宮川 米次
11.5	神奈川縣下へ出張ヲ命ス	技手	岸田 秋彦

11.17 愛知及ビ静岡ノ二縣下
 へ出張ヲ命ス 技手 菊池 常雄
 11.20 神奈川縣下へ出張ヲ命
 ス 技手 岸田 秋彦
 .. 同 囑託 山岸 精實
 11.22 千葉縣下へ出張ヲ命ス
 囑託 島崎 正雄
 11.25 同 囑託 中村二三郎

昭和五年度學友會會計報告

總收入	金壹萬五千壹百七拾五圓拾五錢	
内 譯	金六千八百參拾圓九拾參錢	前年度繰越
	金八千參百四拾四圓貳拾貳錢	會費其他收入
總支出	金五千五百四拾七圓八拾貳錢	雜誌印刷費其他
	昭和六年度繰越	金九千六百貳拾七圓貳拾參錢
内 譯	金六千圓	定 期
	金壹千貳百拾八圓貳拾錢	特別定期
	金壹千九百四拾四圓參拾錢	特別當座
	金四百六拾四圓七拾參錢	現 金